

70年早春、私は氣怠い眠りの中にいた。  
69年、激動としか言い様のない闘いの日々が去り、私は癒されることの無い疲労感に包まれていた。  
昨年12月大学を去ってから、青林書院という出版社で編集の補助のバイトを見付け、バイトから帰るとなるべく早く寝る日々が続いていた。  
家人の人とも余り話を交わす事も無く、ただ眠りたかった。眠ることは全てを停止出来るので、気持ちが楽だった。こうして、バイト先と家を往復していれば、大学、運動、闘争、何も聞こえなかった。誰からの連絡も入らなかった。御茶ノ水の街も遠く、大学も私には無関係な場所になりつつあった。

以前から通っていた池袋の喫茶店“白鳥”にまた時間を空費する為に屯るようになっていた。この様な私を“白鳥”的友人たちは暖かく迎えてくれた。久々宇、山崎、長屋、酒井、村上、小林さんといった人々であり、女性では兼坂さんや中村さんだった。そこには喫茶店左翼の持つ優しさが有った。私の疲労感はこの優しさによって、決して癒されることの無い事を私自身が充分知りつつも、優しさに飢えていたし、優しさを欲していた。  
これまでの闘争、運動、活動の日々とは打って変わって、緩慢な毎日の連続だった。バイトから帰ると、まっすぐに“白鳥”に行き、“白鳥”的仲間たちと酒を飲み、12時頃帰宅して眠り、目覚めるとバイトに行くのが日課だった。

- 98 -

この様な日々の中で一人の女性と知り合った。

“白鳥”的仲間の横山さんの会社に冬休みの間バイトに来ていた羽田さんという信州の人で、二才年上の都会的センスの中に何処か田舎を感じさせる人だった。彼女が東長崎のアパートに住んでいた事も私たちを急速に親しくさせたのかもしれない。毎晩のごとく“白鳥”的仲間と酒を飲み、文芸座にオールナイトのヤクザ映画を見に行ったりで、夜遅くなる事が多く、彼女をよくアパートに送っていた。或晚、酔った彼女を介抱して、私もアパートに泊まってしまった。この時期、私は精神的にも肉体的にも泥酔したかった。しかし、彼女との関係は泥酔の中での延長であり、しょせんは長く続くもので無かった。私自身、人を愛するという人との関係、心を共有するだけの気持ちの優しさを持てる状態には無かった。

羽田さんは花火の様に一瞬、私の心を赤く照らした。

この頃、私はドフトエフスキイに魅れ、彼の作品を読み耽っていた。  
ネチャーエフの人民に対する開示の革命感や地下生活者の「一杯の紅茶が得られるならば、世界がひっくり返ってもいい。」という言葉や罪や罰の様に論理的帰着の為の殺人には強く魅れるのだが、アリョーシャやムシキン公爵はどうとう理解出来なかった。

バイトの仕事でよく神保町の印刷会社にゲラ刷りを取りに行った。或日、帰り道に栗田書店の前を通り掛かると、青解の荻野君がバイトしていた。  
神保町のジャズ喫茶“響”で、コーヒーを飲んだ。話は近況を尋ね合う事とこれからどうするのかといった事が中心だった。荻野君は4月になって、大学が始まれば青解の運動を再開して戦うと言ったが、私は判らないと答えるだけだった。

バイトの原稿取り帰りに阿佐ヶ谷駅のホームで福留君と出会った。この時もお互いに「元気か。」と挨拶を交わし、「元気だよ。」答えると、あれほど多くの事を語り合って来たのに、後の言葉は続かなかった。何となく気ま

すく、そして、何となく安心して別れた。

池袋で飲んで椎名町を酔って歩いていると、向こうから寒そうにジャンパーの襟を立てて、リンゴを三つ四つ抱えて歩いて来る男がいた。何処かで見掛けた顔だなと思って見ると、研連の三井さんだった。「ヤー。」と声を掛けると、彼も気付いて「石川君か。」そしてやはり、次は「元気か。」だった。三井さんも荻野君と同じ事を言った。「4月になつたら、ブンドを再建して戦う。」と、そして「サ連協はどうなっているのか。」と聞かれたが、「判らない。」と言って、気まずさと安心感を感じながら別れた。

私がこの時期に会った大学の人はこの三人だけだった。

私が“白鳥”に屯ろしていた、この時期もサ連協は機能していた。

岡田さん、小島君、小杉君の三名で、事務局をメッキ工場の段々ベットに移して、4月の新学期の闘争の再開に備えて、冬の間も会議を開き、三里塚の現地闘争に参加し、法政大学で開かれていたノンセクトの会議にもサ連協を代表して参加していた。この様な活動の中で、その後、6闘委として形成され明大ノンセクトの中心と成って行く人々、ベ平連の小林君などと知り合う様になっていった。

70年4月、新学期が大学当局の圧倒的な高姿勢の下に始まった。

新入生が入り、田舎に帰っていた人達も戻り、キャンパスは再び活気を呈していた。しかし、有力な活動家の多くは10、11月闘争で逮捕されていて、未だ、獄中だった。そして、三大党派の一つブンドは赤軍派の分裂以来、ゴタゴタしていて、やっと戦旗派として登場し始めたところだった。外見的に見れば例年と変わらない新学期風景が展開されていた。さすがにものものしい検問所は姿を消したもの高い鉄骨の塀が大学と外界を遮り、新入生歓迎集会も中止された。ただ、各サークルの新入生勧誘の中庭の出店だけが許可されていた。4号館や学館内のサークル部室は依然として立入り禁止だった。サ連協の構成サークルの部室は主に通称“モグラ横町”に在ったの

- 100 -

で、部室の問題は無かったが、文研だけは部室が学館内に在って使用出来ないので、当面マル研の部室を共有する事にした。また、サ連協の事務局もマル研の部室に置く事にした。

上江洲さんの様に運動から離れて行った人たちに替って、新入生や永田、池田、永井君らのII文やII政経のクラス闘争委員会の有能な活動家も多くサ連協の回りに集まって来ていた。そして、ブンド、青解といった党派が明大闘争の終末過程で崩れて行く中で、なによりもサ連協は最後まで闘い抜いたという自負が一人一人を強くしていたし、秋期闘争では逮捕者や負傷者を出さなかったので、組織力も維持していた。この様な状況の中でサ連協は6月反安保闘争に向けて、明大のノンセクトを決集すべく6月闘争委員会、略称6闘委の組織化を進めていた。

サ連協、ベ平連といったノンセクトがこうして力を持ち始めると党派との間でも学苑会すなわち自治会の再建を巡って意見が分かれて来ていた。自治会を早期に再建したいと言うML派とあくまでも明大闘争は継続しているとして、全共闘の再建を一義的にすべきとするノンセクトとの意見の違いや青解やブンドの様に明大闘争を自らの都合の良いように総括してしまう党派に対してもノンセクトは不満であった。

明大的学生運動は一定の後退の後も昨年来の活動家が多く残っていたので、エネルギー自体は十分に有り、目前には6月の70年日米安全保障条約の自然延長阻止に向けた6月闘争を控えて、運動は急速に再建されていた。

4.28にサ連協は6闘委として独自の隊列を組んで、その旗を初めて掲げ明治公園に決集した。昨年の様な実力闘争にはならなかつたが、一万人の大カンパニアデモを日比谷公園まで行つた。

この様に大学では新たな運動が展開されていたが、私は依然として“白鳥”にとぐろを巻いて酒と読書の毎日だった。このままの状態で良いのだろうかと自問する事は有つても、何もする気は起きず、バイト暮らしを続けながら心優しい“白鳥”的友人たちに囲まれて、酒と政治談義に明け暮れる毎日もこれはこれで楽しいのだけれども、私の心はいつも空虚さと寂しさで一杯だ

- 101 -

ったが、学生運動も大学も捨て去ったものと自分自身に言い聞かせて、酒で慰める日々だった。

その頃、私は“白鳥”の友人の一人、中村さんという四才年上の女性と親しくなっていた。

私は彼女と行きつけのジャズ喫茶“キッス”で、今日届いた“水虫”四号を読んでいた。“キッス”は池袋東口のビルの四階に在ったハードなジャズを聞かせる店で、店の中は人の顔がやっと見えるぐらいの明るさで、耳をつん裂くジャズが私を包んでいたが、“水虫”四号を前にして、私は静寂の中に一人で居るようだった。薄暗がりの中でワラ半紙にガリ刷りされた一字一字が鮮明に語りかけてくる。そんな私を純子さんは優しいまなざしで黙って見守っていた。

“水虫”四号は3月に発行されていた。内容は秋期間争以降のサ連協の活動や明大闘争の総括や今後の運動の事、三里塚闘争に参加した事、そして、今の自分の心情が小島君が一人で様々なペンネームを使って書かれていた。

私が勝手な御託を並べて運動から離れ去った後、彼は戦い続けていた。

彼の明るい性格を現した文章と共にその行間から漏れてくる決意に私の胸は強く打たれた。読み進むうちに目頭が熱くなり、次第に文字はぼやけて行った。

純子さんは一言「大学に戻るの。」と聞き、私は「うん。」と頷いた。

4月の末になって、やっと、私の冬の季節は終わった。

御茶ノ水の街は再び親しく私を迎えてくれた。

大学の様相は変わっても、マロニエの樹には若葉が繁り、道行く学生の顔にも新学期特有の初々しさとオドオドしたギコチなさが混ざり、確実に春が匂っていた。

私は戸惑いを覚えると共に真っ直ぐに部室に向かうのは気恥ずかしかったので、

半年ぶりの街を一回りを歩くと、“タロー”や“キッチンおとぼけ”は変わらぬたたずまいを見せ、錦華公園の木々は若葉に覆われ、心地好い5月の薄暮れないの園内ではアベックの明るい語らいや演劇部の練習が行われていた。私のこの街への思いは6・9年12月で止まったままだったから、益々、戸惑ってしまった。12月の授業再開粉砕闘争の時点で、今日のこの情景を想像し得ただろうか、否だ、絶対に否だ。今、何が変わり、何が変わら無かったのだろうか。岡田さんや小島君たちの手に拵って、再建されたサ連協は確実に活動を開始していたし、私の活動もここから始まるとの決意というよりも、何か無理やり納得した様な変な気分で、マル研の部室へ向かった。

部室のドアの前に立つと、中から、何かを討論している様子の聞き覚えの有る声が聞こえて来た。一瞬、懐かしさと緊張感がよぎったが、私はドアを静かに開けた。部室は相変わらず古ぼけた机が二つと会議用のテーブルが一つと椅子が十脚ばかりで、乱雑さは変わり無く、室内は長い時間討論が行われていたらしく、タバコの煙でモヤっていた。

私が入って行くと、一瞬、討論は止み、全員が振り向いた。岡田さんら知った顔は笑顔で迎え、新しい見知らぬ人々は怪訝そうに迎えた。私も笑顔で会釈して、隅の空ている席に着いた。

討論は4・28の総括と今後の6闘委の在り方を巡り、6闘委を基軸にして全共闘の再編を行うといった内容だった。私にはこの間の情況が解らないし、私自身の事も未だ話して無いので、黙って聞いていた。討論は小一時間ほどで終り、岡田さん、小島君とどちらからとも言うこともなく連れ立って“タロー”へ行った。初めの内、彼らは私がたまたま大学に遊びに来たと思っていたらしく、健康の事や仕事は見付かったのかなどと運動とは関係の無い話をしていた。私も切り出す切っ掛けが見付からず、彼らの話題に答えていたが、少しイライラして、彼らに言った。「僕は今日、遊びに来た訳じゃないんだ。小島君の“水虫”四号読んだよ。出来る事ならもう一度サ連協の一員として活動したい思ってる。」と告げた。

「帰って来てくれるのか。」と小島君が言った。「いや、帰るんじゃないくて、

今までの自分の不十分性を自己批判して、またサ連協に入りたいしマル研に復帰したいんだ。」と言うと、「自己批判なんて、どうでもいいんだ、また、一緒にやれるのならそれでいいじゃないか。」と岡田さんが言った。

今までの事を詫びて、「水虫」四号の感想などを話してから、学内の様子について質問すると、今、明大のノンセクトはⅡ部ではサ連協やペ平連が中心になって、6月の反安保闘争に向けてサークルやクラス闘争委員会を結合させた運動体として、6闘委を造った事、党派は全共闘再建よりも自治会の再建を目指していて、次第にサ連協などのノンセクトの部分との間で、運動の方針を巡り亀裂が生じ始めている事、また、特にサ連協としてはブンドが崩壊した後、研連執行部の選出に責任を持たなければならない情況になっている事、サークルの切実な問題として学館内の部室の問題が有り、これを契機にして学館解放闘争を盛り上げて、大学当局のロックアウト体制を打破ていきたいと考えている事、全共闘の運動の後退を見て、民青の活動が再び活発になってきている事などを小島君がかい摘まんで説明し、「やらなければならぬ事が山ほど有るんだ。是非、一緒にやろうよ。」と言った。

「皆、それぞれ、事情や不十分性を抱えながら活動しているのだから、石川もこの間の事は気にしないで、また、やろうよ。」と岡田さんも言ってくれた。

私も部室のドアを開いた時の緊張感もほぐれ、やっぱり、戻って来て良かったと思った。

半年間のブランクは大きく、我々を取り囲む情勢も大きく変わっていたし、見知らぬ人も多かったので、大学に戻っても一週間ぐらいは討論などに参加しても発言する事は殆ど無くたまに聞かれた時に答える程度だったが、程なく以前の私に戻って行った。

我々にとって早急に解決を迫られている問題は研連の問題だった。

幾ら、全共闘の再建を唱え、バリケード闘争の続行を叫んでも現実問題としては不可能だった。そして、大学当局の高圧的なロックアウト体制を打破する為に、自治会の問題がクローズアップされて来ていた。ブンドの研連執行

部が崩壊してしまった今、サークルの中心と成り得る運動体はサ連協だけだった。この様な情勢の下、サ連協内部には自治会権力の一つである研連執行部を取ることは全共闘運動と矛盾するという意見も強かったが、討議を重ねた上で、今後、学館解放を勝ち取る為には公的権力、即ち、大学当局（大学当局は全共闘との話し合いは一切拒否していてが、自治会との代表者交渉には応じる姿勢を見せていました。）と交渉力を持ち得る機関として、サ連協は文研の福留君を研連執行部に委員長として送ることにした。

それにも増して、各党派が研連執行部に食指を動かさないということはサ連協が学内に於いて、既に一定の強さと影響力を持ち始めていたからだろう。

5月中旬に開かれた研連大会で福留君が多数の支持を得て、研連委員長に選出された。我々は初めて運動内の公的機関に代表を送ることになった。

時を同じくして、学内の政治情勢は学苑会の学生大会へと動き始めた。

今年の学生大会の焦点は69年闘争の総括と全共闘を含めた総体としての運動の再建を巡って、青解、ブンドがML派から学苑会執行部の権力奪取に向けて動き出していた。それまで、明大Ⅱ部の党派情勢は一方に民青という勢力が存在していたが、彼等の活動は68年の学館襲撃事件以来、合法性を失っていた。新左翼勢力は67年から二年半も連続的に対権力闘争が続いたことや革共同系セクトが居なかったので、殆ど、内ゲバも無く、三年ほど勢力分布も安定した状態が続いていた。しかし、69年の一大闘争を終えて、新左翼勢力は組織的にも個人的にも傷付き、大学当局の高圧的対応を跳ね返す事も儘ならない所まで追い込まれていた。その様な後退的局面を迎えると外部に向かっていたエネルギーが内部に向かい、内部対立が表面化して来た。日を追うに従って、青解のML派に対する批判は益々激しくなっていった。ML派は比較的小さな党派で、明大は都内に於ける唯一最大の拠点であり、その維持は彼等にとって絶対に必要な事だった。

69年の明大闘争を一切棚上げにした形で、その敗北の責任を自らの逃亡とは無関係にML派に押し付ける、青解やブンドのML派批判はML派と共に最後まで戦ってきた我々にとって不愉快だった。

我々の運動内部での対立が表面化してきた5月下旬、このチャンスを待っていたかの様に、民青が学苑会の学生大会の開催を策動してきた。

民青は68年以来その活動は非公然となっていたが、法、商学部を中心に一定の勢力を維持して、常に我々の運動に敵対していた。そして、我々の運動の後退を見計らって、再び台頭してきていたが、我々は断固たる態度で臨むべきだとして、このデッチ上げ学生大会を粉碎することを確認した。

当日、会場の記念館にはML派の部隊が入り、11号館前に集まって学生大会に向けたアジ演説を行っていた民青と我々は7号館前で対峙していた。

双方マイクで激しいアジ合戦が繰り広げられ、御茶ノ水の街には久々に騒然とした空気が流れ、私は背筋にゾクゾクする緊張感と或る種の快感を覚え、「御茶ノ水の街はこれでなくっちゃ。」と心の中で呟いた。

夕暮れ時の初夏の宵といった6時頃、戦いは先ず記念館で始まった。アジ合戦を行っていたML派の部隊が民青側に突っ込んで乱闘となった。この日の戦いは双方共に武器を用意していなかったので、素手による戦いだったが、所詮、民青は幾多の実力闘争を戦って来たML派の敵では無かった。

2~3分で崩れだして、逃げ出していく。記念館での戦闘が合戦となって、我々も学館中庭に集まっていた民青部隊に突っ込んで行った。彼等は11号館の鉄の扉を閉めて抵抗しようとしたが、11号館内に待機していた別動隊が扉を内から押し開いたので、中庭に一気に雪崩れ込んだ。戦いはアッという間の出来事で、勝敗は直ぐに決して、民青は駿台予備校の方に逃げていった。そして、民青は再び学苑会の学生大会を開く事は無かった。

我々の内部にも学苑会権力を巡る対立はあったが、不思議に対民青闘争という事で団結出来たが、所詮、この団結は一時的なものであり、この日が過ぎると学苑会権力を巡る各派の緊張関係が再び表面化してきた。

サ連協は今回の件では全共闘を継承する党派として、ML派を支持していた。

民青の学生大会騒動から一週間ほど経った、5月28日にML派を執行部とする学苑会の学生大会が開催された。一年ぶりに開かれた70年代の運動の再建を賭けた学生大会でもあり、ML派と青解、ブンドの対立も表面化し

- 106 -

ていたので、一般学生の関心も高く会場の92番教室は開会前から満員で各派がそれぞれ陣取って騒然としていた。

サ連協も初めて学苑会中執に研連委員長の福留君を送ると共に、全共闘運動を継続させる為の付帯決議案を提出していたので、やはり会場の一隅に陣取っていた。

定刻の6時半を30分以上過ぎても学生大会は開催されなかった。

会場は青解やブンドからのヤジが激しくなり、次第に陥悪な雰囲気となって来た。ML派の本間事務局長が立ち上がって、「本日は委員長が出席できず、民青の不穏な動きもあるので、学生大会を延期したい。」と言いました。

会場は大混乱となり、ヤジと怒号が飛び交い、あちこちで両派の殴り合いが始まってしまった。ML派の執行部は早々と混乱を避ける様に引き上げてしまい、残された青解、ブンドは「ML派は学苑会を放棄した。」とヒステリックに叫び続けていた。

青解もブンドもこの様な形でML派が対応して来るとは予想していなかったらしく、彼等自身が驚いていた。

学生大会はML派の糾弾集会に切り替えられて、早急に学生大会を再開させると共に自己批判を要求する決議を採択して、10時過ぎに混乱の内に散会した。

我々は基本的にはML派を支持していたが、委員長が居ないとか、事実無根の民青の襲撃をデッチ上げるやり方は権力者が人民を弾圧する時の常套手段であり、左翼として決して許されない事で、びっくりすると同時に不愉快だった。

安定していたML派執行部の弱点は何だったのだろうか。先ず、現象的に見れば青解、ブンドの代議員数が勝っていた。ML派は青解と連立で執行部を握っていたが、今は青解がブンドと組んでML派に反対していた。

ML派は学苑会という中央自治会を握っていたが、各学部自治会や研連の様に直接代議員を選出して来るクラスやサークルに足を持っていなかった。

活動家集団としては優れていたが、大衆基盤は弱かった。党派としては弱小で明大II部が最大の拠点だったので、69年の秋期闘争では党派軍團の主要

な部分を明大の活動家が占めていたことから、多くの逮捕者を出していた。

70年の新学期を迎えて、組織力は非常に衰えていた。

以上様な理由から、執行部の維持が難しいと判断して、学生大会を流してしまったのだろうが、この事は結果として、明大の学生運動に一つの汚点として残る事件を引き起す引金となってしまった。

サ連協としても、6月安保闘争から学館解放へと運動を盛り上げて行こうというこの時期に学内の二大セクトが対立状態に成ることは残念だったが、現実的には静観の態度を取る以外に手立ては無かった。

翌日から我々は6闘委としての6月闘争に向けた情宣活動に入つて行つたが、学内には次第にトゲトゲしい空気が満ち始めていた。

青解やブンドは連日、ML派糾弾のアジェーテーションを繰り返していたが、ML派は沈黙を守っていた。

各党派の6月闘争に対する見解は大きく別れていて、中核派やML派は総力を賭けた実力闘争を唱えていた。それに対して、青解やブンド戦旗派やフロントは実力闘争を口にしつつも本質的にはカンパニア闘争を主張していた。全II部の活動者会議でも、青解やブンドは学生大会の早期開催を主張し、ML派は学生大会を7月まで延期して、6月闘争に全II部共闘の総力を尽くすべきだとして、双方は激しく対立していた。

この時期、各党派は学館の自治会室が使用出来なかつたので、5号館の地下の学生控室を占拠して使用していた。対立している党派がベニヤで仕切つた同じ部屋に居たのだから感情的対立も次第に高まって来ていた。

6月12日午後7時頃、惨劇は起こつた。

6.14闘争を目前にして、ML派のボックスには組織の総力を賭けた戦いの準備の為に日大を中心とする外人部隊が多く集まつてゐた。

青解のボックスでは7月に延期された学生大会まで代議員の結束を維持する為に法学部のクラス活動家を中心とした討論会が行われていた。恐らく薄いベニヤの壁越しに青解の部屋からはML派を非難する声が声高に聞こえて來ただろう。ML派の部屋には6.14決戦に向けて、戦意の高揚した戦士と

武器が充分に用意されていた。ここまで来ればこの後に起る事は容易に想像がつく。

ML派の武装した一団約十五名が討論会を行つてゐた青解のボックスに殴り込んだ。居合せた青解の活動家は先を争つて逃げ出したが、十人ぐらゐが逃げ遅れた。無防備の彼らにML派はゲバ棒とスチール椅子の雨を降らせた。惨劇は10分足らずで終り、外に逃げた青解が武装して態勢を立て直して戻ると、既に、ML派の姿は何処にも無く、積み上げられた椅子の下には犠牲となった人々が横たわり、呻き声を上げ、床は血糊で赤く染まつてゐた。

私が一報を聞いたのは全てが終わった7時半頃だった。

マル研の部室にいた我々の所にML派が青解に殴り込みを掛け、5号館地下が大変な騒ぎで、怪我人が多数出ているらしいと言つて政研の人が飛び込んで來た。我々が駆け付けると青解の武装した活動家が立ちはだかりその間を負傷者が救急車の担架で、運び出されるところだった。

この夜、5号館の地下は負傷者の血と呻き声と殺氣だった青解、ブンドの部隊の罵声に覆われ、それを遠くから恐る恐る眺める一般学生と無力な教官達とマロニエ通りの入り口に待機するパトカーと救急車のサイレンがけたたましく鳴り響いていた。

惨劇の夜、御茶ノ水の街は暗かった。

この夜の出来事を見る私の心は一昨年、中核派、革マル派の6.15日比谷の内ゲバを目の前にした時の様な動揺は無かった。負傷者に対する同情は有つても、これが政治、学生運動の現実であり、明日は私が担架の上に横たわっているかもしれない情況を受け入れる心の準備は大学に戻る時に出来ていた。ただ、そうは言つても、床に広がつた血を見て、呻き声を耳にすれば、それはそれで悲惨であり、内ゲバの現場など誰が見ても快いものではなかつた。しかし、今の私はML派の引き起した事件によって、学内の情況はどう変わるのか、またサ連協、6闘委の闘いにどの様な影響を及ぼすのかといった事の方に強い関心を覚えていた。

5号館からの帰り道、岡田さんや小島君などと「困つた事になつたなあ。」

と言いながら、今後、サ連協の取るべき態度について話し合っていた。部室に戻ると知らせを聞き付けて皆が集まって来ていた。小島君から簡単に今日の事件の概要が報告された後、早速、サ連協として今日の事件に対してどう対処すべきかの討議に入った。

討議といっても全員の事件に対する受け止め方に大きな差異は無かった。M.L派に対しては理由の如何を問わず、今回の内ゲバは明大の学生運動総体への攻撃であり、革命党派としての組織原則を踏み外し裏切ったものとして、我々は彼等を許す事は出来ないと、厳しく自己批判を求めて行く事にした。青解、ブンドには全II部共闘会議に対する党派エゴ的対応、即ち、全共闘運動の総括も不十分なままに一般学生を煽って、運動の再建よりも自治会権力の奪取へ向かった党派の権力志向がこの不幸な事件を招いた原因の一つであると表明した。事件の結果がはっきりする前にサ連協としての見解を立看にして出すことにした。素早く自らの見解を表明した事は他のノンセクト諸組織にも少なからぬ影響を与えた。そして、6月闘争を6闘委を持って明大を集約し、6闘委として6.14に参加して行く事を確認した。この確認はそのまま6闘委でも承認され、我々は初めて党派から解放されて、一人歩きを始めた。

大学当局は6.12内ゲバ事件を口実に、15日まで学内をロックアウトにしたが、我々は大学の取った処置に対抗すると同時に6.14に向けた士気の高揚を図る為に13日に7号館前で抗議集会を持った。事件の翌日で当然の事ながら青解、ブンドは御茶ノ水戒厳令を引いていた。学苑会の事務局員として集会に参加して来た、M.L派の諸君に対して殴る蹴るのリンチが加えられた。後日、判った事だが、12日の事件はM.L派の外人部隊とI部の活動家によって引き起こされたもので、II部の活動家は関知していなかった様だった。また、関知していたとしても学苑会の事務局員としてリンチ覚悟で、この日登校して来た本間さんや上原君たちの姿を見ていると学生運動に生きる活動家としての厳しさと悲しさが感じられた。

6.12の事件をもって、M.L派の明大に於ける政治活動は終りを告げた。

- 110 -

内ゲバが残すものは権力には弾圧の口実を与え、一般学生には恐怖感を与えるだけで、常に憎悪と運動の後退が残るだけだった。  
多くの優秀な法学院のクラス活動家が運動から離れて行った。

3

6月14日、薄曇りの蒸し暑い朝が明けた。

集会は午後1時からだったが、我々は何と言っても今日の集会で、初めて独自のデモ隊を組織して戦う事になっていたし、6闘委の中核部隊でもあるという自負も有ったので、10時過ぎには全員が会場の代々木公園に集結した。最初はサ連協と明大ペ平連の五十人足らずで、集会を行っていたが、我々6闘委の旗の下に明大の様々な闘争委員会の部隊も集まって来た。その結果、別々に集会を持っていた青解、ブンドも合流して、ここに昨年から初めて対外行動の場所で全明治大学が統一した集会を持つことが出来た。各党派やサ連協、明大ペ平連などそれぞれの団体が次々に挨拶に立って集会を行っている時に、横を宮城県のM.L派の反戦青年委員会の人たちが通りかかった。突然、青解の連中が彼らに襲い掛かった。昨日、東京の明大という個別大学段階で起きた内ゲバ事件など知る由もない宮城県の人たちは、驚いてただオロオロするばかりだった。そして、四、五人が殴られてしまった。(青解、M.L派両派の上部組織では6.12の内ゲバ事件を明治大学レベルで処理して発展させないという事になっていたようだった。)我々は青解の連中とM.L派の人たちの間に割って入り、青解の暴力を止めた。「君らはM.L派に対して大衆運動に対する敵対だと批判して来ましたが、今の行動は正に大衆運動に対する敵対行動ではないか。」と激しく抗議した。我々の抗議に対して「これは党派闘争なので、君らの批判を受け入れる訳には行かない。」と答えた。「もうこれ以上、君らとは一緒に集会を続ける事は出来ない。」と言って、6闘委は独自に集会を持つことを宣言して別の場所に移動すると、残ったのは青解とブンドの部隊だけで、他の党派、ノンセ

- 111 -

クトの総てがら闘委の集会に合流してしまった。結局、彼等も今日は明大としての統一した集会なので、党派闘争は行わないと約束したので、再び一緒に集会を続ける事にした。

1時過ぎから、全体の集会が開催された。

ペ平連、各党派、三里塚、その他の代表の挨拶が続き、3時過ぎに代々木公園から日比谷公園に向けてデモに移ったが、この日の参加者は九万人を越えて、新左翼運動史上最大の動員を誇る一大カンパニアデモとなった。

先頭の部隊が日比谷公園に到着しても、未だ、最後尾は代々木公園を出られなかつたということだった。

この日のデモは東大全共闘を先頭にして日大全共闘が続き、明大は六番目ぐらいに出発の予定だった。しかし、今から十年前のこの日、明大の先輩たちが全学連の先頭を切って、南口通用門から国会に突入したという歴史的自負が我々を包んでいた。それに6闘委として、初めて党派の制約から解き放たれて、我々は意気に燃えていた。今日のデモは何がなんでも先頭を切りたいという想いが高まってきていた。よし、構う事はない今日のデモはトップを切ろうということで、我々は意思一致した。

全体集会も終り、九万人のインターナショナルの大合唱が始まるや否や、我々明大の部隊は七十人の旗竿部隊を前面に押し立てて、この日都公安委員会から許可されていた横八列の倍の十六列のデモ隊列を組んで、白地に緑の文字の6闘委の旗を先頭に代々木公園を出発した。サ連協は先頭の6闘委の旗手として小杉君、デモ指揮には私と永井君が立ち、岡田、小島、福留といったいつもの面々がデモの先頭をガッチャリと固めていた。

代々木公園を出て原宿の表参道から青山通りまでは機動隊の規制も殆ど無く、我々は道一杯にジグザグデモやフランスデモを繰り返した。何と言ってもこの日の明大の部隊は千五百名を越える大部隊であり、その先頭に立ってデモ指揮を取る事は爽快だった。明大の統一したデモ隊の先頭を党派の部隊を押させて、ノンセクトの黒ヘルが踊り出るということは特筆すべき事だった。我々一人一人の内にも独り立ちして運動を引っ張って行けるという自負と自信がみなぎっていた。デモ隊が青山通りに入ると機動隊は両側から激しい規

制を加えて来た。機動隊の指揮者がマイクで再三「許可されているデモは八列です。速やかに八列のデモ隊列に移りなさい。」と警告してきたが、その都度、先頭の旗竿部隊が旗を横に倒して、機動隊と小競り合いを繰り返しながら十六列のデモ隊列の進路を確保しつつ前進した。次第に機動隊の規制も厳しくなって、ジュラルミンの盾の脇から殴る蹴るの暴行を加えて来た。我々はスクランムを更にガッチャリと堅く組んで彼等の暴行を跳ね除けて前進を続けたが、機動隊はデモ本隊と旗竿部隊の分断を計るべく、旗竿部隊に攻撃を集中して、旗竿部隊は本隊から切り離されてしまった。赤坂見附の交差点の手前で、我々は完全に前面と両側を固められてしまい十六列二梯団のデモ隊は八列四梯団にされてしまった。途中夕立に合って、ずぶ濡れになりながらも、再三、機動隊との小競り合いを繰り返しジグザグデモやフランスデモを行って、日比谷公園まで、元気にデモを貫徹してた。

何せ千五百人の人間を自分の指揮のままに動かせるのだから、私はデモの指揮を取りながら内心こんな気持ちの良い思いをするのなら、パクられてもいいやと思っていた。

4時前には無事日比谷公園に着いてしまったが、この日のデモは我々に取っては大きな意味を持っていた。即ち、6闘委が我々自身も気付かぬうちに明大の学生運動の中で大きな位置を占める様になっていた。

翌日、大学に行くと、皆6.14の結果には満足していて、6月闘争は我々を中心とした6闘委で、乗り切れる自信がついたし、反安保闘争の終了とともにその余勢を買って、ロックアウト体制打破闘争の第一弾として、一気に学館解放闘争を行うという気運が盛り上がって来た。

#### 6. 14で、明大のML派は活動家の大半が逮捕されてしまった。

明大のML派は原宿の火炎瓶の炎の中に消滅した。

69年闘争の総てを背負い込んで、闘争の中に消えて行った姿に、私はML派の党派として一つの帰着に感銘を覚えていた。

学内では連日、6. 23に向けた集会が待たれていた。  
6. 14に九万人の大動員を得て、明大でも千五百人以上の動員が出来た事は69年の秋以来の苦い思いを抱き続けて来た我々の意氣を大いに上げた。  
6. 23の準備も積極的に進められていた。  
学内の空気も6闘委が6. 14の主導権取った事で、少し変わり始めていた。プラス面としては一般学生が6闘委に対して、今までの党派の運動とは何か違うなという目で見始めて来た事、また、サークルやクラスの闘争委員会に対しても6闘委が結集軸と成り始めた事が上げられる。マイナス面としては党派的に明大の運動を取り込もうとしていた、青解、ブンドと我々の全共闘再建の方法を巡る亀裂が次第に明らかになり始めていた。そして、ML派が消滅してしまったので、学生大会は学苑会中執が招集して7月15日に開催するという事で、全II部の各派が合意した。

6月23日、我々は6闘委の旗の下に明治公園に再び決集した。  
この日の集会とデモに関して、明大の部隊は党派と6闘委の共同指揮となっていたが、ブンドは独自の党派の隊列を組み、青解も主力は党派の隊列に参加したので、必然的に6闘委が八百名の明大部隊の指揮を取る事になった。サ連協は6時前に信濃町駅に集まり、明治公園に向かった。途中、至る所に機動隊の検問が置かれていて、その都度、荷物の中身を調べられ、罵声を浴びせられた。公園に着くと既に三万人からの人数で、はち切れんばかりだった。我々が明大の部隊の集まっている所を探していると理科大のデモが通り掛かった。見ると市川君が先頭に立って指揮をしていたので、声を掛けると、彼も気付いて暫く立ち話をした。理大全共闘は昼から東大駒場に決集して東大全共闘や青解の部隊と一緒に渋谷で、一発ドンパチをやってここまで来たのだが、機動隊の規制が厳しくて、逮捕者は出していないが殴られたり酷い目に遭って、やっと、明治公園に辿り着いた所だと言った。私もここに来るまでの機動隊の検問の様子から、今日は荒れるなと思いながら、「お互い、頑張ろうぜ。」と言って別れた。

明大の部隊を探しながら集会場の中を進んで行くと、演壇の近くに大きな白

- 114 -

地に緑の6闘委の旗とオレンジ色に黒字の明べの旗を見つけた我々は折り畳んで来たサ連協の旗を立てて、デモ隊列を整えて進んで行くと、我々の到着知った明大の部隊は大きな拍手で、我々を迎えてくれた。

この時期、サ連協は内部の人間関係も信頼感が厚く、69年の明大闘争以来、幾多の実力闘争を戦い抜き士気も高かったので、明べと並んで6闘委の中核部隊になっていた。

我々はこの日のデモを69年秋期の闘争の敗北から再建された運動の盛り上がりを学内のロックアウト体制打破の闘いに繋げて、全共闘の再建計り、ML派無き後の流動的に動き始めた学内政治情況の中で、6闘委、サ連協の立場と勢力を確立させる為にも、断固戦い抜く必要が有った。

6月23日が日米安保条約の自然承認の日であり、70年反安保闘争最後のデモだった。集会は6時から始まり、8時過ぎにデモは出発した。この日はトップを切れなかったが、早い順位で出発した。

明治公園を出て青山通りをジグザグデモを繰り返しながら、勝手知ったる通い道という雰囲気で進んで行った。青山一丁目の駅を過ぎる頃から急に機動隊の規制が激しくなり、しばしばサンドイッチ規制の中で、暴行を加えて来た。その都度、私たち旗竿部隊は旗を横に倒して突撃を繰り返し、デモ本隊を守りながら進んだ。後で判った事だが、この時、明治公園で、機動隊めがけて三発のピース缶爆弾が投げ込まれた。我々の付近にいた機動隊もこの情報を逸早くキャッチして、規制を強めて来たのだろうが、我々はそんな事とは露知らず「6月闘争最後のデモで、彼等も空気が入っているんだなあ。」ぐらに思っていた。

本隊から引き離された旗竿部隊は赤坂見附の交差点の所でもう一度機動隊に突撃して、阻止線が崩れた間隙を突いて、前進せずに後退して、再び本隊に合流して、国会を目指した。溜池の交差点内で本隊は渦巻きデモを繰り返し、私たち旗竿部隊は本隊を援護しながら、二度目の突撃を行なった。国会前はNHKの中継車や装甲車がバリケードを造り、その前にジュラルミンの盾を並べた機動隊が催涙弾を打ち込む中、我々は突撃を繰り返した。

- 115 -

私が持っていたサ連協の旗は二本繋ぎだったが、途中からポッキリと抜けてしまいこの日とうとうサ連協の旗は機動隊に取られてしまった。その後、日比谷公園入り口でもう一度衝突が有って、一時は機動隊も公園の中まで入って來たので、公園内も催涙ガスが立ち込めた。

70年安保闘争は67、68、69年の激しい闘争の頂点、終局の闘争と位置づけられていたにも関わらず、幕切れは呆気ないほどのカンパニア闘争で終わってしまった。それは何と言ても69年の10、11月闘争で、街頭実力闘争の限界を見せ付けられてしまい、大学立法によって、各大学が拠点としての機能を失っていた。また、自然承認という形は国会が開かれる訳でも無いので、60年安保の様に闘争の焦点も欠けていた。しかし、我々6闘委、サ連協としての観点から、6月闘争を見て行くならば、勝利したと言えるだろう。この対外闘争を自力で担う中で、我々は初めてセクト、党派の影響から離れて自由になれた。そして、全共闘の再建に関しても自信を深めていた。特に学内の諸問題に対する党派の取組はどちらかと言えば消極的であったが、我々には学館解放闘争やロックアウト体制打破の闘争が我々自身の存立基盤に関わるという切実な意識が有った。

今まで党派が闘いのプランを立てて、我々はそれに従って行動するというパターンだったが、ML派という強力な党派が消滅した今、青解、ブンド戦旗派には未だノンセクトを領導して行く力は無かった。一般学生もサークルやクラスに基盤を置く我々に親しみを感じていた。また、この間の内紛で公然活動の出来ないブンド赤軍派やML派、その他の未だ明大に拠点を持てない党派やそのシンパ層の密かな支持も我々に集まって来ていた。

学内に戻った我々は早速、次の闘争の焦点となる学館解放闘争に本格的に取り組む事になった。先ず、以前から形だけで實際には機能していなかった

臨時学館管理委員会を招集して、委員長に池田君を据えて大学当局との交渉を始めた。学館問題はサークルが基盤だった、サ連協にとっては最も重要な闘争課題であった。新学期から3ヶ月が経ち音研や自動車研といった、あまり政治には無関心なサークルも部室が使えないで困っていた。一般学生にも校舎の中心に位置している学生会館が鉄柵に覆われて利用出来ない事は不自然な姿として映っていた。そして、各サークルには研連委員長の福留君を通じて積極的な働き掛けが行われた。

学生会館が交渉によって開く事は無いと思っていたが、臨時学館管理委員会を通じて大学当局との度重なる交渉を続けていた。我々の69年春の時点への無条件現状回復の要求に対して、神田警察署と結託した大学当局の回答は管理権は大学側が持ち、開館、閉館時間を決め、武器の持ち込み宿泊は認めず、人命の危険が有る場合は学長の判断で警察権力を導入するという、長い間先輩たちが勝ち取って来た学生の自治権を一切無視するものだった。この様な回答を到底認める事は出来ず、我々は実力解放の準備を密かに進めた。

此の頃知り合い以後、親しい友人の一人である池田君について述べると、彼は私と同じ学年で、出身は金沢だった。高校時代には生徒会長をやり、大学に入ると直ぐにブンドの地区党に入って、千代田地区反戦で活動していた。69年1月に安田講堂で逮捕されて、9月に出所してからはII文闘のクラス委員として活動していた。彼の話によると獄中でブンドの分裂を聞いて、これからどうして良いのか訳が解らず、この時が一番苦しかったと言っていた。70年になって小島君らと知り合う様になってサ連協にやって來た。我々の仲間内でも最も高い水準の理論家で、思想的理論には何時も感心させられたが、論争は得意ではなかった。論争になると、どうも土井、福留君には適わなかった。

私の出会いは5月に私が大学に戻り、何かのデモでマロニエ通りにいた時、彼が坊主頭に学生服といういでたちだったので、彼を右翼と間違えて、殴り掛りそうになった。それ以来の付き合いになる。

臨時学館管理委員会と大学当局の話合いは何回も持たれたが、双方の主張は平行線のまま進展を見る事は無かった。そこで我々は第一波の実力闘争を6月27日に決行する事にした。しかし、戦術を巡って、我々と党派の意見は大きく食違っていた。サ連協、6闘委はサークルの要求も有り、また、6月闘争で盛り上がって来ている運動の力で、一気に実力闘争を打ち、バリケード闘争を再び勝ち取りたいと目論んでいたが、党派は時期尚早だとして、学館闘争よりML派無き後の自治会権力の空白を早く埋めてしまう事が先決で、学館解放は秋以降に本腰を入れて取り組みたいというのが本音だった。むしろ今の段階では表面的には実力闘争を口にしても、実際にはカンパニア闘争で、お茶を濁したいのが実情だった。

特に党派としても未成熟で、ブランド各派との分派闘争の決着が着いていなかった戦旗派は数少ない拠点だった明大を平和裡に維持する為、学館の実力解放闘争には強く反対していた。青解は闘争そのものには賛成したが、彼等の思いは学館よりも自治会権力に強く向かっていた。

この様な情況の全Ⅱ部共闘会議で、6月27日は一応カンパニア闘争を行う事で戦術的には合意した。サ連協としては内心大いに不満だったが、大学当局の出方を見る必要が有ったし、実力闘争を行うにしても準備が間に合わず、なによりも半年の間廃墟となっていた学館内部の状態を知り、技術的にも鉄柵の強度などを事前に調査する必要が有った。

27日はデモの最中に別動隊を学館内部に送り込み、屋上に旗を打ち立てる事にした。そして、その結果如何によっては党派の協力を得られ無くても、研連、臨時学館管理委員会の名で、29日に実力闘争を決行する事を決めた。

27日、6時半から学館解放の集会が全Ⅱ部共闘会議の主催で11号館前の中庭で開かれた。

サ連協、6闘委も最大動員を掛け、和泉や生田からも続々と部隊が集まり、その数は五百人を越えて、69年以来絶えて久しく聞く事の無かったデモの喚声が御茶ノ水の街に蘇った。

各党派の型通りの挨拶の後に、6闘委、サ連協、ペ平連、研連、学管委と我

々の仲間内の挨拶になった。それまでの党派の抽象的なアジェンダに変わって、我々の学館を69年闘争の敗北の中で不当に筆り取られた自らの負債の返済として、何としても学館の解放を勝ち取るという決意表明は聴く者に新鮮に響き大きな拍手が寄せられた。

集会の後、半年降りにデモ隊を明大通りに繰り出した。

今日はあくまでカンパニア闘争であり、学館解放に向けた小手調べの戦いだったので、明大通りの制圧はせず、機動隊が現れるとデモはマロニエ通りに引き上げるという作戦で、デモ隊が何度も明大通りを出たり入ったりして、一種の鬼ごっこしている空きに、永井、福留君らのサ連協別動隊はデモの混乱をよそに裏の非常階段の鉄柵を壊して、密かに学館に潜入した。学館内部は一年分の埃が溜まり、まるで埃の絨毯の上を歩いている様だった。しかし、建物自体には異常は見られず、水道は来ているし、電気も新館は切られていたが、管理人が住んでいる旧館の方は来ていると報告された。

デモ隊が何度も鬼ごっこを終えて、11号館の中庭に引き上げて来た時、学館の屋上に6闘委とサ連協の旗が翻り、四階のベランダから、29日の闘争を予告する『6. 29学館実力解放！』の垂れ幕が降ろされた。タイミングといい、演出の鮮やかさといい、今から振り返ると一寸出来過ぎの感有りだったが、デモ隊やそれを取り巻く一般学生や校舎のベランダからデモを見ていた学生達からもひとときわ大きな拍手が沸き起った。

空かさず小島君がハンドマイクを握り、「我々、6闘委、サ連協は6. 29実力を持って学生会館を解放する。」と宣言した。

夜空にくっきりと浮び上がり、6月の風に旗めく、我々の旗は美しかった。

28日、明日の闘争の準備で私たちには忙しい一日だった。

6. 29学館解放実力闘争を呼び掛ける立看と学館管理委員会のビラの作成、鉄柵バリケード破壊の為のベンチやハンマー、ヤットコ、ヤスリ、金ノコなどの購入。丸太の調達は困難だったので、ロックアウトのバリケードを壊した時に出てくる丸太を使用する事にした。私たちは手際良く作業の分担を決めると、それぞれの作業に取掛かった。

私は立看作りの作業に付いた。立看は角材の骨組みにベニヤ板を打ち付け、その上に模造紙を水ノリで張って、ポスターカラーーやマジックインキで文字を書き連ねた看板でアジビラと並ぶ、学生運動の重要な情宣媒体だった。立看作りで難しいのは模造紙をベニヤ板に張る時のノリの濃さと張り方で、キヨウジ屋さんのこつに通ずるもののが有った。また、文字の書体にも独特な形が有り、漢字は中国の新しい簡略化された書体が多く使われていた。我々は明日の闘いの事を考えると、皆、多少の緊張感の中にも満足感も味わっていた。

今、党派を越えようと、その第一歩踏み出しているとの想いを一人一人が囁み締めていた。私たちが楽しげに作業を進めていた時、サ連協を代表して全II部共闘会議の代表者会議に出席していた岡田さんや小島君は党派の懸念な反対に会っていた。彼等は先ず学館解放後の学館の維持を問題にして、29日の実力解放は時期尚早であると反対してきた。前にも述べたように党派のこの時点での再重要課題は学館解放よりも学生大会を成功させて、自治会権力の安定が第一だった。それにノンセクトと呼ばれる我々に重要な学内闘争である学館解放のイニシアチブを執られるのは党派の面子の上でも面白く無かった。しかし、我々は党派の思惑がどうであろうと、我々自身行動を起こしていたし、我々の様なノンセクトと呼ばれる場合左翼は行動し続ける事によってしか、自らの存在を確認し得ないと言うどうしようもない欠点も持っていた。常に情況からの存在証明を行動で、表現せざるを得ないという宿命を持っていた。革命理論を持たない場合左翼の必然だった。だからこそ、情況に対して、誠実であったし、党派の様な面子などは無かった。

今、我々の体に感じるものは学館解放闘争を断固戦い抜く事によってしか、秋以降の運動の高揚は得られないという想いを6月闘争の中で勝ち得た自信と共に強く感じていた。

我々の想いを代表して会議に臨んでいた、岡田さん、小島君は断固として党派の意見を退け、どうしても反対ならば、6闘委だけでも明日の学館解放は戦い抜くと言い切った。この時、党派の諸君には少なからぬ動搖が走ったと聞いた。6月のデモ会場で、突然的に党派を排除した事は有ったが、今回の

様に闘争のプラン段階で、ノンセクトが党派の助力が無くても我々だけで闘いは戦いますよと言いたのは初めてだった。しかも学館解放という当面する最大の学内闘争の課題に於いてである。

この時の青解、ブンドの我々の提案に対する対応は異なっていた。

ブンドはあくまで反対で、三井さんなどは「君らは党派に敵対するのか。」と言って非常に怒っていた。

青解の荻野君は「下部がやる気でいるのに、それを上部が止める訳にはいくまい。」と言って、賛成はしないが闘争そのものには反対しないという態度だった。

この日の会議の結論として、明日の闘いは学館管理委員会が主催して、6闘委が全面的に闘争の責任を負って戦うという事で、話が着いた。

ブンドの三井、青解の荻野、両君の発言はこの時の両派のセクトとしての立場をそのまま現していた。即ち、ブンド戦旗派はブンド内の分派闘争を抱えていて、とても学内闘争まで手が回らないというのが実情であった。また、青解はML派無き後、学内の第一党派に伸し上がって来た者の余裕と我々ノンセクトをも取り込んで、行きたいと思っていたのだろう。

私は会議の様子を聞いて、「何が上部、下部だ、我々は青解のシンパでも何でもないんだ。」と苦い想いがした。

29日、何と言っても今日初めて、闘争を企画して実行するのだから我々は張り切っていた。

二日前に今日の闘争が予告されていたので、学内の空気も緊張に包まれていた。学館解放に必要な道具類の準備も整い、私たちは4時にマル研の部室に集まり闘いの始まりを待っていた。

レボからの報告では御茶ノ水交番わきの道路には機動隊の車が四台ばかり来ているが、駿河台下や中大の方には来ていないとの事だった。

ペ平連からは約二百名の1部の部隊が生田、和泉を出発してこちらに向かっていると報告して来た。

ブンドも非公式に今日の闘いに参加したいと言って来たし、青解も党派とし

では参加出来ないが、Ⅱ文闘、Ⅱ文自治会の形で参加すると言って来た。夕方の5時半、この日は梅雨どきなのに快晴で、夕焼けが美しく、直ぐそこに来ている夏が蒸し暑かった。明大通りは家路に急ぐ人と車で混んでいた。学館の前には生田、和泉からの部隊が到着して、池田君ら学館管理委員会のメンバーが彼らの受け入れを行い、個々に集会を持ちながら我々6闘委の到着を待っていた。

我々は先ず本館の中庭に集まり、ベ平連の人たちと6闘委としての簡単な集会を行い、小島君が「我々は今日、断固実力を持って学館解放を勝ち取り、学館を再び我々のものにしようではないか。」と挨拶をして、闘いの決意を再度確認した。

6闘委、サ連協、ベ平連の旗を打ち立てて、我々は学館へ向けてデモに移った。三十名ばかりの少数だが、この日の精銳部隊であり、一人一人が張り切っていた。大学院の角を曲がって、マロニエ通りに姿を現すと、既に到着していた部隊や一般学生の間から、期せずして大きな拍手が沸き起こった。

我々の到着で全体集会が始まり、各闘争委員会の挨拶が続く中、学館管理委員会の池田君、サ連協の小島君、研連委員長の福留君が次々に挨拶に立った。集会が行われている間に永井君を隊長とする行動隊は学館内に潜入して、内部からバリケードの破壊作業を進めていた。外側からは鉄ノコを使って、鉄柵の撤去作業が始った。7時半頃、集会を終えた我々は慣例に従って、明大通りをデモして、サ連協の丸太部隊を先頭に、半年の間、我々を圧倒し重く伸し掛かって来ていたロックアウト体制の象徴、鉄柵への攻撃を開始した。別動隊の手に拠って、鉄柵の柱は鉄ノコで切られていた。丸太部隊が回りの一般学生の拍手と掛け声に合わせて、二度三度と突撃を繰り返すと、脆くも傾き始めた。そこにロープを引っ掛け、我々の想いの全てを込めて、ロープを引くと鉄柵は轟音と共に崩れ去った。丸太部隊を先頭に喚声を上げて、一気に学館に雪崩れ込んだ。学館は半年の時間でかなりの厚さに積もった埃で、我々を出迎えてくれた。

学苑会や研連の部屋に入ると壁の落書きが6年で時間が止まってしまったかの様に語り掛けてきた。

「秋期決戦勝利！」「大学立法粉碎！」「訪米実力阻止！」などなど……。旧館の方には電気が來るので、各部屋の灯りが次々に点灯され、学館は明るく輝き、今、息を吹き返した。

興奮と喚声と拍手に包まれて、旧館の二階のバルコニーに6闘委、サ連協以下、各派の旗が並び、感激に声を震わせながら学館管理委員会委員長池田君がアジテーションの第一声を発した。「我々の手によって、学館は解放された……。」

今、私たちは学館を解放し、私たちの手に取り戻したのだ。

マロニエ通りは更に大きな拍手と喚声に包まれた。一般学生も最初は恐る恐るでは有ったが、次第に学館に入って來た。

学生自治の拠点で有り、常に学生運動に重要な空間を提供してきた学生会館を我々自身の実力を持って解放し、取り戻したことは大学当局のロックアウト体制に対する明確な挑戦状でもあった。

機動隊も御茶ノ水交番の横の通りに來ていたが、明大通りまでは來ることもなく、パトカーが一台大学院前の通りの向う側に止って監視しているだけだった。興奮が一渡りして収まった頃を見計らって、旧館バルコニー前で再び『学館解放勝利』の集会を持った後、御茶ノ水交番前までデモを行って、この日の闘いを終えた。

私たちは久々に充足感と心地好い疲労感に浸った。遂にやったという想いが一人一人の胸に有った。

昨年12月からの冬の季節を経て、今、反撃の第一歩を踏み出したのだ。この学館闘争は6闘委、サ連協にとって、6月闘争の中で、潜在的に燃り続けていた党派からの自立という課題も決定的に押し進める事に成った。

現実の学館解放は一夜の夢に終ってしまった。

翌日、登校して来ると、学館は再び固く鉄柵に覆われ、回りを機動隊が取り囲んで、一步も近付けない状態に戻っていた。

この様な結果に対して、党派は我々ノンセクトの力量の限界と無展望を批判

したが、我々はそんな揚げ足取り的批判には意に介せず、大学当局に対する反撃の第一歩としての効果は有ったし、一般学生に対しても我々の存在を印象付けたという意味で、良かったと思っていた。

秋からまた学館管理委員会を前面に押し立てて、粘り強い交渉と実力闘争を織り交ぜた長期的な闘争を組んで行かなければ、現実に学館は我々の手に戻らない事も同時に今回の戦いで思い知らされた。

#### 6. 29 学館解放闘争の後、学内の政治情況は 7. 15 の学苑会学生大会へと大きく動き始めて行った。

M.L 派が消滅した今、学苑会の権力は当然、青解とブンド戦旗派が執るものと思われていた。サ連協やペ平連を中心としたノンセクトの間では急速にこの間の 6 月闘争や学館闘争で見せ付けられた党派の負の側面に対する批判が高まって来ていた。即ち、全共闘の再建問題を全く棚上げしたまでの無原則的な権力志向、実際の運動の中で、どれだけ明大の自治会として機能しうるかという疑問、そして、学館闘争やその他の個別明大の闘争課題に対する取組の甘さ、この様な党派政治の下では我々の運動、6 9 年闘争によって切開された全共闘運動という新たな地平が無意味になって終い、6 8 年の頃の様な党派支配の状態に戻ってしまうのではないかという危惧が急速に強まつて行った。しかし、現実に学生大会で党派に対抗して対案書を提出して、党派と対峙関係に入りながら、自治会を維持して行く自信は全く無かったが、このままでは明大の学生運動は駄目になるという想いだけは強くなつて行つた。

サ連協内部では土井さんや永井、小杉君たちを中心にサ連協自身が自治会権力を志向することは全共闘運動と合わないという意見も強かった。

全共闘運動は個人の闘う意思を基軸として出発した以上権力とは無縁であるべきで、サ連協もその様な運動体として存在するという意見だった。しかし、

現実には学苑会という自治会が存在し、大学当局も全共闘との交渉には応じないが、自治会との交渉には応じるという態度を示していたし、学苑会は年間四百万円の資金を持っていた。過去、今日まで、この資金は常に自治会権力を握った党派が独自的に使用して、我々闘う諸団体には無縁なのが通例であり、それゆえに自治会権力を巡る党派間の争いは醜く、やくざの抗争と何等変わらない様相を呈するのだった。

岡田さんや小島、池田、福留君、私などはこの様な現実に対して、大学当局との交渉機関としても全共闘運動の事務局的機能を果たし、また、全共闘運動を資金的な面で強化する為にも、今は自治会権力が必要だと考えていた。従来の様な党派政治はもう沢山だった。我々自身の運動の自立という意味でも最終的に党派の第二戦線から脱却して、全明治の学生運動に対して責任を負わなければならないし、その時期に来ているというのが岡田さんを中心とした私たちの意見だった。

当然の帰着として、学生大会には対案書を持って臨むべきだと考えていた。両者の意見にはそれぞれに一面の真理が有ったと思われるが、最後に岡田さんの「これは政治の賭では無く、人生の賭だ。」という迷台詞でこの議論は決着した。我々はサ連協有志の資格で、7. 15 学生大会には対案書を持って臨むこととなった。土井さん達も個人としての協力は惜しまないとして、我々の行動を支持することになった。

常に、サ連協ではこれが良い事なのか悪い事なのか良く知らないが、上江洲、岡田と受け継がれる系譜の中で組織として重大な決定が下される時に何時も浪速節的個人の意思が論理に勝ってしまうという体質が有った様だ。今回も岡田さんの一言でそれまで白熱していた論争が嘘のように終わってしまった。ペ平連でもサ連協と同じ様な論議が繰り返されて、結局、松岡さん、小林、安能君が個人の資格で参加することになった。

文学部のクラス闘争委員会で活動していた永田君も参加することになった。

対案書、執行部人事案が出来上がったのは学生大会前日の 14 日だった。対案書と人事案を小島君が中央執行委員会に提出すると、青解の荻野君は一

躊躇しい顔を見せたが、直ぐに余裕を持って「我々はMし派とは違う、自治会の民主的ルールは守らなければならない。意見の違いは学生大会で大いに戦わう。」と言って受理した。

党派に対して対案書を持って学生大会に臨むという事はその日の内に知れ渡り、学内の諸勢力に少なからぬ驚きを与えた様だった。民青を排除してから続いているシャンシャン大会ではなく、5月の大会に統いて運動の方針を巡って相反する勢力が学内に出来ている事は、取りも直さず、69年の大学闘争が党派の指導から離れた私たちの様なノンセクトを生み出し、それらが着実に育ち始めていた。また、Mし派やブンド赤軍派のシンパも多く存在していて、それらの人々は今回の青解とブンド戦旗派の野合による自治会権力の奪取を快く思っていた。

以上の様に我々は二つの全く異なった意見を持つ人々から支持される事になった。

7月15日、540番教室、学苑会学生大会は我々の対案書提出で、にわかに学内の関心を集め、夏休み直前という時期にも関わらず多くの代議員と傍聴者を集めて開催された。

会場の周辺はMし派の襲撃に備えるという理由で、青解、戦旗派の武装部隊約七十名が警戒していた。確かにMし派に対する警戒の意味もあったであろうが、我々に対する無言の圧力でもあった。この時点では我々も対案書を出したものの、我々の意志を付帯決議よりも少し強い調子で訴えたいと思っていたので、割りと気楽に構えていた。

6時半頃、学生大会は始まり、議長の選出が行なわれた。

三名の内学苑会中執から一名出るので、残り二名が代議員の中から選出される事になっていた。青解から学生大会屋と悪名の高かった桜田さんが、我々からは小林君と福留君が立候補した。投票の結果、桜田さんと小林君が当選して議長となつたが、小林君と福留君の合計得票は桜田さんのそれを大きく上回っていた。会場は大きなどよめきに包まれた。

- 126 -

それまで余裕を持って、会場内を見渡していた青解の荻野君や戦旗派の三井さんの顔が一変して険しくなった。特に荻野君は学苑会の委員長から、この夏に予定されている青解の全学連大会で委員長に就任するらしいと噂されていた。しかし、彼等以上に我々が驚いてしまった。まさか党派を上回る得票を得る事など到底信じられなかった。サ連協とペ平連が持っていた代議員数など高が知れていたし、対案書提出の意味は我々の党派に対する決意を込めた意思表示を目的にしていたので、代議員獲得の為の事前の運動は何も行っていなかったし、対案書の提出は昨日であり、誰も学生大会で自治会権力を取ろうとも取れるとも思っていなかった。

議長選出の後はこれまでの華やいだ雰囲気とは打って変わって、会場は緊迫感に包まれて行った。もうそこには党派の余裕など無かった。

荻野君が立って本議案書の説明を始めたが、例によって、党派の論理であり、アジテーションであり、聴く者にとっては難解であり、退屈であった。

長くて退屈な荻野君の演説が終わると、小島君が対案書の説明を始めた。

小島君は今日の全Ⅱ部共闘の置かれている情況を説明し、自治会権力は闘う諸個人に対して開かれた存在と有るべきで、全Ⅱ部共闘の事務的執行機関として、存在するべきであると訴えた。

当面する闘争課題としてはロックアウト体制打破の闘いとしての学館解放闘争に全力を傾け、八派共闘の党派の闘いから闘う諸個人が闘いの原点となるべく、全共闘運動を継承して行きたいと述べた。

この説明は聴く人を大いに魅了した様だった。

小島君自身もこの間のバリケード闘争から冬の季節を経て6月闘争へと困難な闘いを戦い抜いて来た自信と自負も有ったのだろう、その語り口はアジテーションとは違って、一語一語が聴く者に感銘を与えた。

説明が終わるやいなや、青解、戦旗派の代議員から鋭い批判が小島君に集中した。多くは自治会を革命戦略の中でどの様に位置付けるのか、その視点が欠落していると言うが、我々一人として革命戦略など持ち合わせていなかった。この批判には小島君も全く答えられず、我々が置かれている情況を述べ、全Ⅱ部共闘の再建と学館解放を全力を賭けて戦い切るという決意を繰り

返すだけだった。

党派に対して一般の代議員からは革命戦略よりも現実の闘争をどう戦って行くのかと質問されて、荻野君達はやはり「日帝ガ……。」に始まるいつもの調子でしか、答える事が出来なかった。ほんの2週間前にたった一日ではあったが、何処も未だ出来なかった学館解放を実現した事が、多くの代議員に我々の対案書が説得力を持って受け入れられた理由だった。

我々と党派の議論は囁き合う事なく、繰り返され時間だけが過ぎて行った。次第に一般の代議員は委任状を置いて帰る者が多くなって来た。こうなると、固定代議員を多く抱えている党派の方が次第に有利になって来た。そして、本議案書と対案書は各々の人事案を含めて一括採決される事になった。この頃には私たちもやるだけはやったし、我々の考えは党派の人達には充分に理解して貢え無かったが、多くの一般学生を含む人たちに語り掛ける事は出来たので、対案書を提出した事だけで充分満足していた。荻野君達、党派の人々も結局は自分達が勝つだろうと思っていた。

投票の結果は32票対28票で対案書が勝ってしまった。

一瞬、会場は気が抜けた様に静まり返った。次の瞬間、意外な結果に対する驚きとどよめきが会場を覆った。二、三の者からは拍手が送られたが、別の所からは「情況左翼に自治会が維持出来るか！」と罵声が飛んで来た。

一番驚いたのは小島君以下の私たちだった。

「まさか。」と言ったきり声が出なかった。比較的落ち着いていたのは議長をやっていた小林君と前に党派で活動していた池田君ぐらいで、小島君、岡田さんも、ただ、呆然とするばかりだった。

新執行部として、演壇に並ぶと少しは落ち着いて来ましたが、大変な事に成ったなあと思うばかりだった。党派の席からの野次とその他の席からの拍手が交差する中で、新執行部の紹介が行われた。

新学苑会執行部	委員長	小島 保
	副委員長	小林 功二
	副委員長	池田 真

- 128 -

事務局長	永田 修
財政部長	松岡 幹夫
情宣部長	岡田 年生
組織部長	石川 彰
	以上7名

その他、厚生部長や各々の副部長は兼任。

紹介の後、青解の桜田さんがまだ何か言おうとしたが、小林君が「君の役目は終わったよ。」と言って、彼からマイクを取り上げたのが印象的だった。

この瞬間、都内で新左翼が自治会権力を握っている大学で、初めてノンセクトが選挙で、党派を破って自治会の執行部を取ったのである。

恒例によって、各種のスローガンを採択し、インターナショナルの合唱の後、御茶ノ水駅まで、デモ行進に移った。こうなると党派の武装部隊七十名は不気味な存在で、我々は七人しか居ないし、党派がその気になれば簡単にテロれるし、昨日までとは打って変わった厳しい目が我々に注がれていた。

私は内心無事に駅まで行けるのかなあとビクビクだった。

デモは無事終り解散した。

その後直ぐに、喫茶店“田園”に集まって、第一回の事務局会議を開いたが、意見らしい意見は何も出なかった。ただ、選ばれた以上やりきるしかないとの決意を確認して、明日、学生大会の結果を立看とビラで学友諸君に知らせる事を決めて、この夜の第一回の事務局会議は大変な事になったとの想いだけが先行して、皆、興奮の気分で、散会した。

私は帰り道でも「全く大変な事になった。」と繰り返し呟いていたが、緊張感と、とうとうやったという気分が渦巻いていた。今日まで、サ連協という闘う組織を創り、曲りなりにも大学闘争、69年闘争をそれなりの誠実さを持って戦って来た、当然の帰着なのだろうと心の片隅で思っていた。

翌日、我々はマル研の部室に集まり、早速、立看とビラを作成し、登校して来る学友諸君に配ると共に小島君が学苑会委員長としてのアジェーテーションを送った。

学苑会の事務局を何処に置くかという問題が有った。  
 サ連協やベ平連の部室が在る記念館はキャンバスの中心から離れていた。  
 M L派の部屋が5号館の地下に空いていたが、ここは内ゲバの記憶が生々しいし、党派と対峙関係に入った今、青解や戦旗派と隣り合わせに居る事は余り気分の良い事ではなかった。結局、学友諸君に接しやすく、大学生活のメイнстリートのマロニエ通りに面していて、活動の中心に成りやすいという理由で、11号館の入口の脇に在った商学部自習室を占拠して、ここに学苑会事務局を置くことにした。

我々ノンセクトと言われる部分が明大で全II部の中央自治会である学苑会執行部を青解、戦旗派の両党派と選挙という形ではあるが、争って勝った事は我々以上に青解、戦旗派はもとより、その他の党派や他の大学の全共闘から驚きの目を持って見られた。

各党派の機関紙は『明大II部の権力ノンセクトが握る。』という見出しで、全共闘運動の結果として生まれ、彼等から情況左翼と批判されていたノンセクトに対して或る種の危機感を感じると論評していた。一方、中大や法政大のノンセクトの人々からは好意に満ちた評価が寄せられた。

7月15日という時期は我々にとって非常に幸運だった。  
 明大は20日ぐらいうから前期の試験に入るので、15日を過ぎると授業は殆ど休講になり、そのまま8月、9月と夏休みになる。  
 新執行部にとって、夏休みは体制、運動を創るのに有効な時間となった。

小島君が住んでいた東中野の通称“城山ハウス”と呼ばれていたアパートに連日集まって、今後の学苑会をどう運営していくのかの討議に入った。

先ず、直面していたのは今回の自治会権力の掌握がM L派と青解の内ゲバ事件から発生していたので、学苑会の印鑑や会計原簿といった、自治会執行部にとっての三種の神器が揃って無かった。  
 大学当局もこの事を盾に取って、新執行部を認めようとしなかった。我々も自治会という公的機関の継承性を持たせる意味からも早急にM L派と連絡を取って、印鑑などを受け継がなければならなかった。  
 我々は水道橋駅の近くに在った、M L派の機関紙を発行していたレボルション社を訪ね、本間さんと連絡を取ってもらった。彼と水道橋の喫茶店で会い自治会としての継承の手続きを行なった。本間さんも我々の執行部を快く認めて、これから頑張ってほしいと激励してくれたが、その言葉には何処となく寂しさが感じられた。M L派は6月闘争を実力闘争で戦った後、その方針、総括を巡って、組織はガタガタになっていた。そして、何よりも彼自身、明大的学生運動の主要な活動家として、この間、幾多の闘争を戦って来たが、今、明大から去って行くことへの寂しさの様に思われた。  
 本間さん自身は千葉の方の工場で、組合活動を始めたところだと言っていた。  
 ここに明治大学に於けるM L派の活動は完全に終息した。

城山ハウスは中野駅と東中野駅の間の木造アパートが中心のゴチャゴチャとした住宅街に在った。“城山公園”という割合に広い公園が近くに在るので、昔、お城でも在ったのだろうと思われるのだが詳しくは知らなかった。現在は新宿などの都心に通勤する若い独身のサラリーマンや学生のアパート街になっていて、どのアパートも四畳半や六畳の独身者向けが多く、夕暮れ時から宵にかけて、二十代の男女が沢山歩いていた。その光景を見ると私は何か華々しさと同時に新しい形でのスラムが形成されている様にも思えた。城山ハウスはそんな街の中のごくありふれた六畳一間のアパートで、小島君が安田会頭などと一緒に住んでいた。また、この部屋は当時ブンド赤軍派の公然組織のアジトにもなっていたので、重信、遠山、田村さんもよく出入りしていた。彼等のフラクションは我々の会合が終わってから入れ違いに行わっていた様だった。

我々には城山ハウスで討議する事が沢山有り、最初は何から始めて良いのか分らず、ただ、決意だけが先走る事が多かったが、毎日の討論の中から我々の学苑会、開かれた自治会の輪郭は次第に明らかになって行った。

先ず、学苑会=自治会と今日的全共闘運動をどう位置付けて行くか。全共闘運動が何故、自治会を止揚して今日の運動の推進形態として定着し得たのか。機能としての自治会が眞の意味で学生一般の意思を代表し得たのは、中大、早大の学費闘争の頃までであり、その後の政治闘争、大学立法に端を発した学園闘争や東大、日大闘争の中で、層としての学生層は分解し、闘う主体は党派や闘争委員会に集まる個人がそれらの組織を通じて闘争を表現し、その表現された闘争を一般の学生に示すという形になって来ていた。それは層としての学生を代表することにはならないが、個人が最終責任を負った形で、闘争を戦い抜くという新しい強力な運動体、全共闘を形成して行った。

その内部では常に革命論よりも自己がいかに生きて行くかという問題が重要なテーマとして語られる事が多かった。早大闘争の時の様に自治会、自らがバリケードを撤去するという事は全共闘運動の中では有り得なかった。

全共闘はあくまで闘争機関であり、大学闘争などの闘いの場が設定されている時には有効に機能し得るのだが、どの様な終り方をしようとも闘争が終息して、通常の学生運動、大学での運動に戻って行った時、全共闘は大学当局との交渉権などを持っていなかったので、次第に形骸化してしまった。

特に、明大では全共闘運動が未成熟な形でしか機能し得なかったので、その形骸化は著しく、このままでは党派の第二戦線に戻って終うだけだった。以上の様な観点に我々が立つ時、全共闘運動を保障、育成していく為にも事務執行機関としての自治会は必要であり、闘う主体を代表して、大学当局との交渉や各闘争委員会への資金的援助も必要だった。だから、我々の自治会は一方で全学生的代表であるという形を取りつつ、現在では層としての学生層は分解してしまったという観点に立って、重要な政策、方針の決定は全Ⅱ部活動者会議に決定権を委ねて、その執行機関として自らを位置付けた。

次に党派との関係をどうして行くのかについては学苑会の意義付けの中から当然の帰着として決まって行った。彼等と革命戦略の論争をするのでは無く、

大学という共有する基盤で共に戦う組織として、彼等が我々に介入して共闘する事を歓迎する。しかし、今まで多くの場合、党派が自治会権力を握った時、これを私物化しているところに問題が有ったのだから、権力を共有する事は出来ないが、個々の政治課題や大学内部での諸問題に関しては共闘関係を発展させて行こうという事になった。但し、上納金的な金銭の支払は一切行わず、資金は全Ⅱ部共闘に集まる諸団体に委ねられるべきだとした。

これらの討論と平行して、戦旗派とは人間関係などから三井さんを通じて小島君が、青解とは松岡さんや永田君が関係改善の交渉に当たった。

党派からの情況左翼という我々に対する批判は確かに的を得ていた。

我々ノンセクトは今まで行動者として戦って来た。69年冬から70年6月までは各組織の再建と安保闘争という目前の闘争課題が在ったが、それらが一応終りを告げた今、これから10月以降の大学での闘争課題を何に的を絞って、我々の運動を盛り上げて行くのかは重要な課題だった。二学期からの運動を何に向て行くかは、学生大会での公約である学館解放を最大の闘争課題として、全力を挙げて取り組む事にした。

6月末に行った一連の学館に対する実力闘争は自治会権力を取るという結果をもたらしたが、学館の解放そのものは一夜の夢に終わってしまった。

その事を総括すると、何と言っても闘争に対する取り組みが6月闘争の余勢を買うという形で、不十分だった。時期的にも夏休みを前にして、闘争に継続性を持たせる事が出来なかった。

二学期からは池田君を中心に学館管理委員会を強化して、もう少し時間を掛けて大学当局と粘り強い交渉を行う事にした。また、交渉を有利に展開させ大衆的機運を盛り上げる為に、学館解放に向けた署名活動を行う事にした。この署名活動という運動形態に関してはやり方が民青チックであるという反対意見も有ったが、過去一年間、我々は政治闘争にのみ目を向けていた為に、我々と一般の学生との間には隔たりが有った。それを埋める意味からも署名運動を通じてクラスに入って行くことが、特に今まで、サークルやペ平連などでしか活動経験の無い我々には必要だった。クラスに入って、学館解放を

アピールすると共に我々の学苑会の存在を身近かなものにして、根強くクラスで、活動を続いている民青を牽制する。同時に強力な大衆的基盤を背景にして、大学当局との交渉を有利に展開させ、必要に応じて実力闘争も行う総合的な戦略に基づいた戦術の一環として、署名活動を位置付け、冬までには名実共に学館解放を勝ち取ることを目標にした。

富津寮での事務局合宿を通して、団結と運動に対する決意を更に固めた。8月21～3日まで青解、戦旗派の党派の人達を交えて、拡大中執合宿を信濃学寮で開いた。さすがに拡大中執合宿が始まった第一日目はお互いに緊張気味だった。しかし、二日目、三日目になると、なんだかんだ言つても、同じ明大という場所で、共に二年間も戦い抜いて来て、一人一人は気心も知れた仲なので、打ち解けた雰囲気になって、セクト、ノンセクトに別れて野球の試合を行うようになっていた。

この様な関係は学生運動の盛んな大学の中にあって、明大独特の一風変わった学生運動の雰囲気を創っていた。それは何に起因しているのかと言うと、伝統的に民青や革共同系の党派が育たなかった為だと思われる。

明大の駿河台地区ではM.L派の事件以後一年半に渡り、新左翼同士の内ゲバは起きなかった。学内は変な義理、人情の雰囲気が強く、我々にとっては平和で住み心地好い大学になって行った。

話が横道に逸れてしまったが、我々は党派の人達を迎えて、城山ハウスでの連日の討議の中から生まれた、開かれた学苑会への考え方、学館解放闘争への戦略、そして、我々と党派との関係を述べた。特に、問題と成るだろうと思われていた学苑会＝自治会のとらえ方に關して、自治会そのものを私物化すること無く全ての闘う人々と開かれた関係を持ち、その原則に立って党派とも友好的な関係を維持して行きたいと言った。

我々の考え方が原則論に立っていたので、党派としても異論を唱えることは出来なかった。

青解、戦旗派両派は共にそれぞれの事情で、我々と事を構えたく無かった。

- 134 -

戦旗派はブンド内部での分派闘争が継続中で、最大拠点の明大で事を構えるのは彼等にとって、命取りに成りかねなかった。

青解も党派としてはノンセクトに対して、友好的立場を取っていたし、早大、東大などで対革マル派闘争が激しくなっていた時期で、党派闘争も苦戦が続いている。彼等もまた拠点明大を平和に維持していたかった。

我々に大衆的支持が集まっていた事や69年のバリケード闘争を戦い抜いた我々執行部の一人一人が党派の活動家に比べても遜色の無い活動家に育っていた事も大きく作用していた様だ。

執行部が発足した時に懸念されていた事は一つ、一つ解決して行ったが、一つ厄介な問題が未解決のまま残っていた。我々はM.L派との事務引継ぎを終了した時点で、当然、大学当局は新執行部を認証するものと思っていた。しかし、大学当局は民青の学苑会のことを持ち出して、認証を渋っていた。この問題は昨年まで炭谷さんを委員長とするM.L派の執行部を認めて、学苑会費を支払っていた事が有り、その執行部から事務一切を引き継いでいるのだから、学苑会の正当性は我々の執行部に有ると主張した。

その主張に対する大学当局の論理は内ゲバ問題や黒崎君を委員長とする民青も学苑会の認証を求めて來ていて、大学当局も困っているなどと曖昧な言い方を繰り返していた。このふざけた論理が一年前ならば一笑に付されたのだろうが、それを真顔で持ち出して来る所に彼我の力関係の逆転を見せ付けられた思いだった。

この頃から次第に学内の教職員の間では日共、民青の力が強く成って来ていた事が、学生部長に大木教授が就任した事などに現れ始めていた。

その様な大学当局内の権力構造の変化は我々との交渉や学生運動対策にも微妙な影響を与えていた。いずれにしても大学当局の論理は市民社会の論理に照らしても論拠の薄いものだった。

次に、大学当局が持ち出してきたのは委員長小島君の学籍問題だった。

私を含めて、執行部の面々は既に大学に対する幻想は無く、卒業しようなどと思ってなかった。その結果、執行部全員が学費未納となっていた。私など

何人かは未だ未納という状態だったが、小島君だけは未納の猶予期間が過ぎていて、除籍に成っていた。この事を盾に取り、学籍の無い者が委員長の執行部は承認出来ないと言ってきた。当初、我々は闘う学友が多くの学友の支持を得て委員長に就任している事実の方が学費未納などというブルジョア市民社会的な論理から起因する資格よりも重要で有る事、過去にM.L派の炭谷執行部の時代に滝沢さんが除籍されて身分を失ってからも中央執行委員を統けていた事実などを理由に挙げて、大学当局に対決していた。しかし、一方ではこの問題は本質的にはあくまで言掛かりであり、小島君の除籍が解決すれば良い事なので、学費を納入するということで、復学の手続きを取る様にとの交渉も行ったが、大学当局は教授会の承認が必要だなどと言って、確かな回答を出さ無かった。

夏休み中に学苑会の承認問題を解決することは出来なかった。

多くの問題を抱えながらも我々ノンセクト学苑会執行部はその基礎を固めて、新学期に向かって行った。

各自が執行部としての自覺に目覚め、党派の手を借りなくとも学苑会を運営して行ける自信も付いて来て、発足当初の驚きや不安は消え、自分たちが責任を持って明大の学生運動を担って行くのだという自負を感じる様になっていた。

9月、明大は未だ夏休みであるが、他の多くの大学では新学期が始まった。明大キャンパスもサークルの人たちを中心に登校してくる学生も増えて来た。授業が無いので活気を帯びているのはサークルの部室が在る記念館や4号館だけで、授業が行われる5、6、7、9、10、11号館付近は未だ夏の眠りを貪るように静かだった。

この時期、全体の学生運動の動きは6月の反安保闘争を終えて一段落とい

う感じで、大きな対外的な政治闘争は無かった。

その中で、秋の闘争として盛り上げていこうといっていた課題に入国管理法案改悪阻止闘争が有った。

安保体制の継承という日米の安定的提携に成功した日本帝国主義はいよいよ東アジアを中心とした海外侵略を開始すべく、国内法規整備の第一歩として、国内居住のアジア人の監視体制を強化する入国管理法の改悪へと動き始めた……。と言う視点に立って、在日アジア人の問題から取組み始めたが、政府が国会への上程を諦めたので、闘争は盛り上がりずに終わった。我々は秋期の最大政治課題と見て來たので、9月1日、15日に行われたデモには在京メンバーに総動員を掛け、約三十名ぐらいの部隊ではあったが、学苑会として参加した。

10月、新学期を迎えて、満を持していた我々執行部は精力的な活動を開始した。

先ず、9月から始まった入管闘争の情宣活動に着手し、立看、ビラの配布、登校時に於ける連日のアジ演説と大々的な情宣活動を行って、それまでややもすると低く思われていた小島委員長の知名度を高めて行った。

連日の情宣活動は党派間で密室的政治を行って来た、それまでの学生運動を真に学生一般に開かれた存在にするべきであると言う自治会活動の基本でもあったし、我々の意思でもあった。一応、党派との安定的関係を夏休み中に作り得たとはいえ、組織力も武力も持て無い我々にとって、大衆的基盤の強化は絶対必要な事だった。我々ノンセクトの感性の水々しさも手伝って、執行部への一般学生の支持も次第に高くなって來た。

新左翼運動の全般的な退潮と学内での内ゲバの間隙を縫って、またぞろ抬頭し始めて來ていた民青系の学内活動に対しても有効な牽制策にもなった。

前に触れたが、学苑会事務局は11号館一階のマロニエ通りに面した商学部の学生控室に設置されていた。この部屋は大学が休みの期間は大学当局がロックアウトするので使用出来ないが、授業中は学生生活の中心に位置して、色々な活動を行う上で、非常に便利だった。また、仮に部屋が軍事的攻撃を

受けるような事があっても学生大衆の面前で行われるから、この部屋は大衆

の目という巨大な壇に囲まれた学内で、最も安全な場所であった。

この時期、色々な問題が同時進行的に12月の学生大会まで絡み合って展開して行った。

入管闘争は主に青解の人達が中心になって取り組んでいた。

10月中旬に電気大学で中部地区活動者会議が開かれた。我々も学苑会として参加したが、会議は青解やML派の党派利害が醜くぶつかり合う場で、何ら建設的な決定は出なかった。今から振り返るとそこでどんな内容の話し合いが持たれたのか思い出せ無いが、この会議で印象に残っている事は当時、美人闘士と週刊誌などで、持て囃されていた東大全共闘のゲバチエの髪を振り乱して叫び立てている姿が美人という言葉からは程遠いイメージだった。

入管問題は1月に政府自民党が同法案の国会上程を断念するまで続き、一応70年の秋の最大の政治闘争と位置付けられて戦われたが、安保問題と比較して、問題が国全体に及ぼす影響が少なかった事、象徴と成る事件が無かった事、直接学生の利害に関わりが少なかった事などで、断続的に全般的規模で、集会やデモが行なわれたが、大きな闘争へと盛り上がる事は無く終息していった。

我々執行部は学内での正統な自治会執行部としての地位を確立しつつも、大学当局との自治会執行部承認を巡る交渉は依然として難航していた。

それまで鳴りを潜めていた民青系の活動が次第に活発になり始めて来た。

彼等とは68年の学館襲撃事件以来、同じテーブルに着いて話し合うという事は無かったが、春の学生大会の時期を除くと衝突も無く、一見平和な対立関係が続いている。主に我々の側の事情で、学外の政治闘争が続いている事や内ゲバ事件や全体的な運動の低下で、彼等に関わっていられなかった。大学当局も我々を見透かした様に新執行部の承認を渋るという情勢に有ったので、またぞろ民青系が学苑会黒崎執行部なるものを掲げて台頭いて来た。この様な情況に対して、現実に民青系の力が浸透している法、商両学部の自治会の執行部としては彼等を認めるが、中央自治会である学苑会の執行部は

我々であるとして、学苑会執行部の潜称には断固たる決意を持って臨むことにした。

我々も新執行部としての決意や自信に燃えて、学館問題や執行部の承認問題のビラ配りに連日クラスに入っていた。時として、彼等民青系の諸君とも顔を合わせる機会が多くなり、その都度、小競り合いを引き起こすことも多くなっていた。そして、とうとう或日、11号館でビラを配っている最中に民青系の黒崎君と遭遇した。我々の行動は常に大衆の目に晒されていなければならぬとして、彼を捕らえて11号館の中庭に引き出し、彼等に対する糾弾の集会を開いた。68年の学館襲撃から69年の大学闘争に対する敵対、そして、今日まで学苑会執行部を不當に潜称している事などを厳しく糾弾した。彼も自らの非を認めたので、今後は学苑会を潜称しないことを誓わせて、自己批判書に署名させた。しかし、その後も彼等は学苑会を潜称し続け、我々との小競り合いは繰り返された。

10月中旬から、この秋に最も力を入れ、我々の存在基盤を打ち固める闘争と位置付けていた学館解放闘争に再び突入して行った。

夏休み中から強力に再建されていた学館管理委員会が大学当局との折衝に入った。交渉の中で、既に、和泉、生田の両学館は使用出来るのに、駿河台地区だけが未だに閉鎖されているという事実は、大学当局と権力が癒着している証拠であり、幾多の街頭闘争の出撃拠点となっていた学館を永遠に閉鎖したいという権力の要請でもあった。

大学当局も大木学生部長、市毛副学生部長を前面に押し立てて強気であり、我々もまだこの様な交渉事に不慣れだったので、交渉は遅々として進まなかつた。交渉を側面から支援する一つの行動として、全II部規模で、学館解放に向けた署名活動を展開した。

学館解放に向けた署名活動は多くの事を教えてくれた。この間、我々は政治闘争に運動の重点を置いていたし、出身母体がサ連協やベ平連だったので、クラスへのオルグ活動を軽視していた。

この事は自治会や学生運動を一般学生から遠い存在にしてしまっていた。

6. 29 の様な実力に頼るだけでは学館解放は出来なかつたし、解放を実力で維持する力も我々には無かつた。

連日、ピラを持ってクラスに入り、7号館、10号館前で登校して来る学生に呼び掛けて署名活動を展開した。冷淡だった一般学生も次第に学館問題に興味を示し出した。特に左翼的とは言い難かった自動車研や音研といったサークルも部室を取り戻したいという思いから、学館問題に取組み始めて来た。最初は民チックな運動として、取り合わなかつた党派も青解のクラス活動家を中心に関わって来る様になつた。

民青の活動も我々のクラスオルグによって、完全に活動基盤は失われて行つた。また、クラスに入り積極的に授業を妨害し、教授たちに議論を挑む事で、彼等の欺瞞的な民主主義なるものも一般学生の前に晒け出しがつた。10月中旬から始めた署名活動は思わぬ効果も色々生み出しながら、駿台祭に再度の実力解放を行う事に照準を合わせて着々と進められた。署名活動に最も面食らつたのは大学当局だった。それまで新左翼といえど、ゲバ学生と言われて来たように専ら政治闘争、街頭実力闘争が主力で、学内の地道な運動を積上げて行くのは余り得意で無かつたので、力を失つてゐる時には大学当局も力で、封じ込めて置けば良いと思っていた。

それが打つて變つた我々の行動であった。

署名活動は日を追つて盛り上がり、学内には久々に活気が蘇つて來た。この様な状況で、大学当局も一定の譲歩を余儀なくされて、最終的に学館管理委員会に「武器を持ち込まない。宿泊しない。人命に危険が有ると大学が判断した場合は警察を導入する。」という条件を受入れるならば学館を開いても良いと非公式に打診して來た。

今日から振り返ると、この案を受入れて、学館を曲りなりにも開いた方が良かったとも思へるが、當時未だ、そこまで情況を彈力的に判断して展開していく能力は我々に無かつた。学館解放闘争を今秋の主要な闘争と位置付けていた関係もあり、妥協に繋がる提案を受入れる訳には行かなかつた。

大学当局との交渉は進展を見る事も無く、その後、凍結されてしまつたが、この間の学内に於ける運動の一定の盛り上がりと、署名活動を通じて、次第

我々執行部の権威が確立して行つた事は成功だった。

この様に我々が積極的にクラスに入り、学苑会の権力が確立されて行く事は民青系の諸君を必然的に学外に追いやる結果となり、彼等の焦りが次第に色濃く成つて行つた。

10月の下旬、民青は錦華公園で、集会を開いた後、彼等の中央集会に向かう為にマロニエ通りをデモ行進して來た。何時もなら我々との衝突を避けて、錦華公園での学内集会の後は駿河台下に出て中大の方に迂回するか、又は水道橋駅へ出て中央集会へ行くのが、通常のスタイルだった。我々も彼等が駿河台下方面に迂回して、中央集会に出発して行く場合は衝突を避けていた。しかし、この日の民青は角材のプラカードで武装して、マロニエ通りから明大通りに向つてデモを開始した。

この日もいつものスタイルだらう言う事で、民青のデモがこちらに向つて来ていると学苑会室に第一報がもたらされた時、部屋には五、六人の人数しか居なかつた。至急、各セクト、サ連協、ペ平連の部室に伝令を飛ばしたが、武装を整えた人数を到着させるには最低15分程度の時間が必要だった。

その間に民青のデモ隊はマロニエ通りを通過してしまうだろう。二百名以上のデモ隊に対して五、六人の人数ではどうする事も出来ないので、11号館前の鉄柵の門を閉めて、内側で構えて通過させようという事になった。

デモ隊のシュプレヒコールが聞こえ始め、その声も次第に近付いて來た。

武装して表に出て門を閉めて守りに着こうとした時、誰かが「マロニエ通りは俺達の縄張りじゃないか。」と叫んだ。その一言で全てが決つた。

どうも私の関わつて來た運動では理性を越えた一言が重要な行動局面を切り開く事が多く様だ。

急遽、私たちは攻撃を仕掛ける事に決定し、ヘルメットを被り、片手にコーラビン、片手にゲバ棒といういでたちで、勇然と戦いを挑んだ。

彼等は二百名という人数と事前にレボの報告で、我々が待機していないと確認していたらしく、悠然と隊列を整えて、マロニエ通りをゆっくりと進んで來た。

先頭集団が11号館に差し掛かった瞬間、我々は扉を押し開き、先ず、コラビンの一斉攻撃を仕掛け、彼等が怯んださくに一気にゲバ棒でデモ隊に殴り込んで行った。戦いは30秒ぐらいで終わた。不意を突かれた民青のデモ隊は大混乱に陥り、雲の粉を散らしたように錦華公園の方へ逃げて行った。我々は充分に痛撃を与えることに成功した。余りにも攻撃が旨く行きすぎた事に驚いて、我に帰ると、五人がゲバ棒を片手にしたまま呆然としてマロニエ通りに佇んでいた。

この時の夏とは異なった秋の軟らかい夕日と黄色に色付き始めたマロニエの葉のコントラストが今も鮮やかな印象として残っている。

急を聞いて駆け付けて来た学内各派が早速11号館前の広場で民青に対する糾弾の集会を開いた。“マロニエ通り事件”は学内各派に我々学苑会執行部の持つ行動力とゲバルト力を見せつけることになった。

事件の後、暫くは民青の活動も静かになり、我々は学内の権力を完全に掌握する事に成功した。この事件は後々までも“マロニエ通り事件”と呼ばれ、我々の武勇を語るものとして語り継がれた。

10月も下旬になると、学外の政治闘争の人質闘争も一段落し、対民闘争も“マロニエ通り事件”で一応の決着が着けられ、党派との関係も学内問題に関しては我々がヘゲモニーを取る形で、友好的な雰囲気となり、学内にはこの二年間の間で最も静かで、平和な季節が訪れて来た。

夕方、バイトを終えて登校すると、マロニエ通りは夕日に紅く染まり、緑と黄色のマロニエの葉も道路の両側に建つ校舎やビルもその辺り一面が紅く燃え立っていた。

私は11号館の屋上に登り、夕闇に暮れて行く東京の街を飽きもせず眺めていることが多かった。地名からも駿河台と呼ばれる様に明治大学はちょうど

神田川に沿った断層地帯の脇に建っていたので、屋上からの展望は非常に良かった。夕焼けから次第に夕闇に変わり、夕焼けの紅と空の青の有彩色のコントラストの世界から、無彩色の世界へと変化して行く時、その接点に展開する日本的色彩に辺りが包まれて行く時の風景がとても好きだった。そして、御茶ノ水通りの方から潮騒のように聞こえてくる雜踏のざわめきに包まれて漫然と風景を眺めていると、とうとうここまで来てしまったと思うと共に言い知れぬ充足感に浸っていた。

この頃の私の一日はバイトを終えて登校すると6時ぐらいまで、7号館前でのアジティーションや10号館への対民パトロールを兼ねたビラ入れを行い、私などの様に既に学業を放棄している者は授業に出る必要が無かったので、明大通りに在る中華ソバ屋“味一番”に出かけ夕食を取るか、11号館の屋上で風景を眺めたりしていた。

学苑会の事務局会議は大抵7時頃から9時頃まで開かれ、必要な場合は11時頃まで立看作りやビラ刷りのモスケルが有った。

暇な時はこの頃から次第に親しくなっていた青解の大貫君などと駅前に在る喫茶店“ブティヤック”に出かけて話しをするのが大体の一日の日課だった。

ここで少し“味一番”や“ブティヤック”に触れておくと、“味一番”は明大通りの楽器屋や寿司屋の並びの中華ソバ屋で、通称“味一”と呼ばれていた。お勧め品は一杯百五十円の中華丼で野菜のアン掛け煮を御飯に載せた丼で、安くてボリュームが有った。我々の日常的な夕食になっていた。ニラレバいためライスも安くて美味しいメニューの一つだった。多少、お金にゆとりの有る時は餃子をプラスしていた。

“味一番”はおじさんとおばさんと息子とあと二人ほど人を使っていたが息子がデブで、私に似ていた。おばさんはよく私の注文に盛りの良さで答えてくれた。

“ブティヤック”は駅の並びの小さな喫茶店で、持ち主がヨット好きだったらしく、店内はヨットの船室風に造られていた。最初、M.L派の人がよく利

用していたが、この頃は我々と文研、演研の溜り場になっていた。我々が溜り場に出来る最大の条件はコーヒー一杯で、粘っても苦情が出ないことだったが、“ブティヤック”の二階はこの条件にピッタリだった。我々が行き出した頃、持ち主の娘さんが店を賄っていた。年の頃二十五、六歳の何処となく黛ジュンに似た美人で、サッパリした気性の持ち主で、我々にも好意的だった。

7月から始まった我々の新しい運動、自治会権力の掌握と続いた激動の時期が過ぎて、学内も落ち着いて来ると、我々と学生の関心は専ら駿台祭へ向って行った。

駿台祭は69年の秋期闘争で中止されていたので、二年ぶりの開催だった。II部の駿台祭実行委員会は大関、奥山、永井君らを中心にして、砂川、堀江君といった主にサ連協とブンド赤軍派のシンバの諸君で、構成されていた。夏休み中に実行委員会が組織されて、準備が進められていた。

私も実行委員会に加わらないかと誘われた。本来、お祭り好きの私は直ぐにこの話に飛附きたかったのだけれど、学苑会の中執の仕事が忙しく、権力を巡る情勢も流動的だったので、やむなく断った。

前に書いたようにII部の駿台祭実行委員会は伝統的に新左翼が維持して來たので、年に一度の活動家の休日の様相を呈していた。（I部は66年の学費闘争以後は応援團を中心とした体育会が権力を握っていた。I部、II部の実行委員会は分裂していた。）

特に今年、私たちは学苑会中執という権力の中心にいたのだから大いに祭りを楽しみたいと思っていた。

学苑会は駿台祭実行委員会（以下、略称として駿実）に駿台祭を通じて、学館解放を再度決行したいと申し入れた。祭りを利用した作戦の内容は駿台祭の開幕セレモニーを利用して一気に学館の実力解放を再び勝ち取るというもので、祭りの期間を利用すれば大学当局も権力の導入をおいそれとは謀れ無いという見通しが有った。この間、展開して來た署名運動に於ける一つの結論を出す必要にも迫られていた。大学当局は学生の学館開館の希望の現れと

して、署名の成果に一定の評価を認めつつも、学館開館には以前から提出されている三条件を受け入れることが前提であるとして譲らなかった。大学当局との交渉は、依然、膠着状態が続いていた。

以上の様な状況で、駿台祭を学館解放に利用しようという意見は急速に中執内で高まって行った。

10月31日夕刻、駿台祭はロックバンドの強烈なサウンドと学館解放に向けた鉄柵を切り刻むモノイズの奇妙な和音の中で開催された。

祭りはロックのリズムと学館解放で盛り上がり、久し振りに夜遅く間で、御茶ノ水の街は喧騒に包まれて賑わった。

解放された学館に入ると、内部は6月に一度解放した時と変わらず、堆く積もった埃が無言の内に我々を出迎えてくれた。早速、用意した電球を取り付けると、学館には半年ぶりに灯りが点り、その明るさは我々に優しかった。私も各サークルの展示を見て回ったり、模擬店で酒を飲んで、皆と談笑したりして、楽しい“活動家の休日”を満喫していた。

何と言っても学苑会中執という権力の中枢に居る事は快いもので、何処に行っても顔であり、音研や自動車研といった、普段馴染みの薄いサークルの人々からも挨拶をされると、正直に言って心地好いものが有った。

我々が“活動家の休日”を満喫している時に腐敗は深く静かに進んでいて、その膿は必然的に吹き出そうとしていた。

今年の駿実は大関、奥山が中心になって進められて來たが、大関は既に学生では無く、印刷会社に勤める身分で駿実の発行するパンフやポスターなどが彼の会社に一括して発注されていて、価格が不当に高いという噂が流れていた。学苑会中執は松岡さん、池田君が駿実にとかくの噂が有るが金銭面の不祥事は起さない様にとの申し入れを行っていた。

駿台祭二日目にこの問題が表面化して駿実は收拾のつかない混亂に陥り、II部の駿台祭は中止の止む無きに至った。

その後、駿実のメンバーが大関の家に押し掛けたり、また、これに対して大

関が駿実のメンバーを告訴したりして、明大の学生運動史上でも希に見る醜い事件となってしまい、混乱はその年の暮れまで続いた。  
混乱の中で、多くの一、二年生の若い活動家が傷付き、消耗して行った事が何よりも残念であった。

幸に学苑会はこの事件に無関係だった。  
駿台祭では百万単位の金が動き、学生である当時の我々には見たり手にする事の出来る金では無かった。  
この様な大金を手にする時、人は時として魔が差すことが有るのだろう。  
駿台祭を金儲けの手段としようとした人間がいた事は非常に残念な事だった。  
この様な人間が口で、綺麗事を並べても信用する事は出来ないし、我々も左翼を自任する以上は駿実の事件を見聞きするにつけ金銭面での問題だけは起したく無いものだと想いを新たにした。  
今年の駿台祭は混乱の内に中止されてしまったが、学館は解放され泊まり込む事は出来なかったが、その年の暮れまで使用する事ができた。

駿台祭で、一時中断していた対大学当局との交渉が再開された。  
大学当局は未だ学苑会執行部を承認していなかったが、次第に争点は煮詰って来ていた。最終的に大学側は我々の執行部を承認するに当たって、二つの条件を出して来た。  
一つ目は小島委員長が学籍を失っているので、他の委員長を立てる事。  
二つ目は7月の学生大会は色々な問題を含んでいたので、一つ目の条件と絡めて、再度、学生大会を開催して執行部の大衆的承認を得る事。  
以上の二点に落ち着いて来た。  
第一の条件は運動の原則としては受け入れ難い条件だったが、この頃、我々の内部にも問題が持ち上がっていた。それは小島君がブンドの鞍旗派に入って活動したいとの表明していた。小島君個人が党派に入って活動することにな何等問題は無かったが、我々の執行部が党派に対する批判の中から生れて来た以上、学苑会の委員長としては容認することは出来なかった。

- 146 -

この時点で、事実上小島君を委員長から解任して、対外的には小林君を委員長代行として立てていた。  
以上の様な内部事情で、第一の条件は運動の原則としては問題があるが、この際、受け入れても構わないという空気が執行部内部で、次第に強くなって来ていた。  
第二の条件は我々もこの間の学館闘争やノンセクトとしての我々の運動、闘争の信を学友諸君に問う必要が在るだろうという事は我々内部でも語られていた。再度の学生大会を成功させる事で、対党派との関係性もまた明確化出来るだろうとの考えていた。  
以上のように我々の内部要因と大学当局の要求が一致して来たところで、我々執行部と大学当局は来る12月11日に学生大会を開催する事を条件に小林新執行部を承認するという内容で、半年に渡って続けられた学苑会執行部の承認を巡る対学生部団交は合意に達した。

ここで少し対学生部団交の様子を書いてみる。  
団交の出席者は我々の側は小島君以下の事務局員と時々各自治会の委員長を交えた中央執行委員が出席した。  
大学側からは大木学生部長、市毛副学生部長、小野田学生課長、中野学生係長、中西、藤井学生課員などが出席した。  
団交会場は学生部事務室の裏に在った会議室で、二時間ぐらい行われる事が多かった。  
我々は全員が発言したが、大学側は大木、市毛両学生部長が発言するだけで、他の学生課の職員が発言する事は殆ど無かった。  
団交も始めのうちは我々の側に気負いが有ったので、喧嘩腰で大声を出して、一方的に主張を述べて退席してしまう事が度々有った。しかし、10月になると、双方の立場は違っても人間としての信頼感が生まれて来て、話し合いはかなり本音を出し合う形で、友好的な雰囲気の中で行われる様になって来ていた。  
大木学生部長は日共的体質を持った物静かな紳士であったが、私には何処か

- 147 -

タメキであるという印象だった。それに引き換え市毛副学生部長は考え方は大正リベラリストだった。専門が労働法だった関係もあり、彼はなかなかの論客だった。彼との論争は内容の有るもので、論敵として不足の無い人だった。性格も陽気で、筋が通らないと絶対に妥協しようとはしなかったが、一度、論理が通るとその結論には潔く従うというタイプの人だった。時として、大学当局にとっては失言の多い人だったが、私は個人的に好感を感じていた。

学内の闘争としては時期的に駒台祭と前後するが、寮闘争が盛り上って来ていた。明治大学Ⅱ部には三つの寮が在ったが、それらは老朽化していたので、大学は堀切菖蒲園の近くに堀切新寮を建設したが、寮の管理運営権を巡って寮生との間で対立が続いていた。

堀切新寮は未だに使用出来ない状態だった。

寮闘争は翌年の春ぐらいまで続いた。寮闘争の主力と成っていたのは松陰寮の諸君たちで党派的には青解やブンド赤軍派のシンパの人たちだった。

学苑会も全面的に支援することにした。対理事会との大衆団交を要求していくが、大学側から黙殺されていた。

寮闘争自体は学館闘争などに比べると、闘争主体が寮生に限定されていて一般性が薄かったので全学的な闘争には成り得なかった。

我々は寮闘争を足掛りにして、学館闘争や学苑会の承認問題を含めて、大学当局へ懸念を掛ける必要が有った。

寮闘争委員会が学生部で団交を行っている時に教務課への襲撃を断行した。学生部のちょうど真上に在った教務課を襲うことは真下で行われていた団交に大いに圧力を加えることに成った。

我々四十名ほどの部隊が乱入すると、職員は先を争って逃げ出した。

そこらじゅうの棚を引き倒しテレビや扇風機などを思う存分に破壊した。

破壊を欲しいままに行うのはバリケード闘争以来であり、なかなか痛快だった。

学内の諸勢力を我々学苑会が一定の指導性を持って掌握している事、組織的実力闘争を戦えるだけの力を持つまでに運動が回復している事など、この襲

撃は多くの意味で、我々の力を大学当局に知らしめた。

戦術的に寮闘争として大した意味を持たなかったが、戦略的には我々の運動にとって大きな勝利だった。

11月も中旬を過ぎると、季節の姿も秋から冬へと変り始め、マロニエの大きな葉が散り、道路を黄色に塗り替えていた。夕日が沈む時刻も次第に早くなり、私が登校する頃にはアテネフランスの方の空が微かに赤黒く夕焼けの名残を残しているだけだった。

我々は駒台祭の忌わしい思いを断ち切って、12月11日の学生大会へ向けた準備に全力を注いで行った。

学生大会の代議員を獲得するためにクラスに入って行かなければならなかつた。しかし、手足となるべき実行部隊を持っていなかつた。

活動家としては個々に優秀な個人だったが、執行部の成立の当初からサ連協、ペ平連のあくまで有志であつて、それらの組織とは切り離された存在だった。この事はクラスオルグを行う活動家を確保出来ないという困難を招いていた。我々はペ平連に協力を要請したが、個人的には一般的協力には応じられても組織としては取り組めないと言って来た。サ連協は既に崩壊していた。土井、小杉、高橋君ら優秀な活動家の多くはサ連協から離れてしまい、永井君ら残っていた人々の多くは駒台祭事件に関わって全く消耗していた。

サ連協に代つて、歴研や政研を中心に長沼、高橋と言つた、くだらない連中がし戦線なるものを組織していた。

彼等には学生運動そのものを担つて行くバトスは無かつた。

サークルは我々を学苑会執行部に送り出した後、再び、学生運動の第二戦線に立ち帰つてしまつた。

この事態の責任の多くは我々自身に有つたと思う。

69年の敗北から、ただ、まっしぐらに上昇指向で走り続けて来て、サークルを闘争に組み込むことによって、サークル自体を自然に解体してしまった。我々と同じ時間と空間を共有して来た者には何も語ることも無い共有の体験が存在したが、それを一方的に後輩達に押し付けて引っ張って来てしまった。サークルの運動がこの様に解体されて行く中で、マル研は高橋、宮本、富樫君らを中心に闘争と離れて、本来のサークル活動に戻って行った。

私はこの様なサークルの行き方を否定して、今日まで来てしまったが、L戦線などというくだらない連中を目の前にする時、マル研の行き方を否定する気にはなれなかった。

私たち自身が気が付いた時には、サ連協は幻の彼方に消え去っていた。明大のノンセクト運動に一つのピリオドが打たれ、我々ノンセクト自治会解体の第一歩が音も無く静かに始まっていた。

ペ平連、サークルの協力が得られない状態を解決する為に、商学部の自治会執行部を民青から奪還しようと活動を始めていた商共闘の諸君と手を組む事にした。しかし、商共闘を引き入れた事は学苑会執行部の中に少なからぬ動揺を引き起こした。

商共闘は多分にM L派の影響を受けていた。事務局会議の席上で、池田君が毛主義者はスターリニストだと発言してしまい、この発言から商共闘は我々執行部に対して、本来、自治会執行部は開かれた存在であり、闘う部分に対して、その主義、主張に関わらず開かれていなくてはならず、君達ノンセクト自治会執行部が何時も言って来た事に池田君の発言は反するものだから、自己批判すべきだと強行に申し入れて来た。

この事は我々執行部の大きな弱点だった。

学生運動の組織体は強い弱いは別にして、共通の思想性を基に組織されていたが、我々には一般的行動の規範は有っても、思想性は各自別々だった。我々の執行部は思想性を棚上げした形で、69年の闘争を戦ったという行動の共有の中で、育まれて來た人間関係の信頼感の上に成り立っていた。

この事は行動者として存在する場合は強い糸となつたが、思想的な闘いには

- 150 -

無力だった。

池田君の発言に対して、商共闘は自治会の原則論を振り翳して攻撃して來た。この原則論は我々が7.15の学生大会で党派を批判したことであり、今、我々が批判される側に立ってしまった。

結局、我々は商共闘の批判に反論を加えることが出来ず、執行部は自己批判することに成ってしまった。この件を契機にして、岡田さん、池田君が執行部を去って行った。そして、卒業する松岡さんに代って商共闘の小林博俊君が財政部長として執行部に加わることになったが、事はこれで収まるものでは無かった。

我々の内部矛盾を党派が見逃すはずは無かった。

社青同解放派、青解は学苑会執行部に青解のメンバーを加えることを強力に申し入れて來た。青解としては、現在、都内でも一二を争う拠点に成長して來た明大の駿河台地区をより強固な安定した拠点にして置く必要があったし、他に強力な党派が明大には存在し無いという事情も踏まえて、我々執行部への介入戦術に出て來た。

彼等がその場合の論理の中心に据えて來たのは商共闘と同じ、自治会は闘う者全てに開かれた存在で、在るべきだった。我々は他を排除するべき思想を持って無かったので、この論理を突き付けられると全く弱かった。

青解は執行部のポストを二つ要求して來た。

我々は内心不本意だったが、闘う者全てに開かれた自治会として、彼等の要求を受け入れた。

戦旗派はブンド諸派の中では未だ少数派であり、ブンド内部での混乱が収納されておらず、個別明大の自治会問題に表面だった行動は取れなかった。

基本的には学生大会は静観の立場で、II政自治会を通じて付帯決議を提出するという対応だった。

我々は内部に多くの問題を抱え、各闘争機関や党派との消耗な討論が繰り返されている中で、私は学生大会へ向けた事務的準備に組織部長として取り

掛かった。私個人の想いとして、この学生大会を今まで戦って来た学生運動の一つの決算として、是非とも成功させたいと願っていた。

振り返って見ると、68年の民青系との決定的な分裂の後、学生大会と言えば總てが党派間の密室政治の反映で、学生大会は常にシャンシャン大会だった。その結果、一般学生の関心は年々薄れて、代議員も定数ギリギリを集めるのが精一杯で、時にはあからさまな委任状の水増しが行われたりしていた。昨今のこの様な現状に対して、私は少なくとも委任状に頼らず、正規の手続きを踏んで出席して来る代議員を確実に定数以上集めようと心に決めていた。その事実に拠ってのみ、この間の我々の運動が真に大衆的支持を得られたのか、また、我々の運動が党派のそれを越え得る可能性を持っているのかを知る上で、重要な基準だと思っていた。

各学部の時間表を学苑会室に張り出し、代議員の選出の為に各教室へ入って行った。

我々の人数が少なかったので、大抵は一人で教室に入り代議員の選出を行った。また、立看や登校時間や休み時間には連日マイクでアピテーションを行って、強力に情宣活動を展開した。

多くの教室に入って行って感じるのは、特に一年生の場合、既に全共闘運動そのものが彼らが入学して来る以前に有り、私たちの様に運動そのものを創造して来た者と出来上がってしまっている運動を選択する者との違和感だった。

彼らの質問は主に民青系と我々の違い、また、暴力という事に集中していた。時には内心またかと思う事も有ったが、考えて見れば二年前には私も同じ疑問を抱いて、同じ質問をしたものだと思い返して、質問には丁寧に答えて行った。

民青の問題に対しては、この間、学内で彼等が行って来た事を一つ一つ実例を挙げて話し、暴力に関しては大学当局の行うロックアウト体制を例に引き、体制権力に対する人民の抵抗権として話しを進めた。中には民青系と思われる者もチラホラと居て、まことしやかに暴力に関しての反対意見を述べる者

も居たが、一、二年生の代議員の選出は順調に進んで行った。

三、四年生のクラスになると専門の科目が多くクラス単位の授業は極端に少なく、代議員の選出が難しかったが、反面、楽な面も多かった。

何故なら、三、四年生ともなると新左翼系、民青系、無関心層とクラス内での色分けが既に出来上がっているので、一々余計な説明を行わなくても代議員の選出は直ぐに行われた。

7月の我々の執行部の成立が以前の党派と我々が異質な存在として、一般学生には映っていたのだろう。そして、その後の運動の展開で、一般学生の我々に対する関心も高まって来ていた。

内部では既に党派との妥協が始まっていたが、外見的には党派との緊張関係にも関心は高かった。

この時期が在学中で、一番学内を走り回った時で、私の頭の中には全学部、全学年の時間割りが叩き込まれていた。

代議員の選出と同時に我々は学生大会の議案書の作成にも取り掛った。

ここで、我々は厄介な問題にぶつかった。それは我々執行部が財政的に無一文だった事だ。我々執行部は今日まで、サ連協、ペ平連、研連などからの資金援助と各々の個人のカンパで、活動して来たが、学生大会を成功させるには、どうしても今まで以上に情宣費や議案書の作成に費用が必要だった。

依然として、学苑会費は凍結されたままだった。

我々は大学当局に対して「資金を出さないのは、口では学生大会を成功させれば、我々の執行部を承認すると言いながら、実質的に資金を凍結して学生大会の開催を妨害しているではないか。」と強く主張した。

結局、大学当局も我々の主張を認めて、学生大会の開催資金として十萬円を仮払いした。

内訳は事務用品代三万円、印刷機代七万円だった。